

lwami-Ginzan Silver Mine Site

[温泉津地区恵珖寺墓地]

平成18(2006)年3月 島根県教育委員会・大田市教育委員会 石見銀山遺跡は、平成17年暮れに文化庁長官のサインを添えて国からユネスコ(国際教育文化機関)の世界遺産センターに世界遺産登録に必要な推薦書が送付され、明けて1月4日に正式に受理されました。これでいよいよ石見銀山遺跡は世界の舞台で評価を受けることになりました。今年夏にはユネスコの諮問機関であるイコモス(国際記念物遺跡会議)の現地調査が予定され、その評価書をもとに、来年の7月頃に開催される第31回世界遺産委員会において登録の可否が決定されます。

石見銀山遺跡は日本を代表する鉱山遺跡であり、ここで培われた鉱山技術は日本各地の鉱山に波及しました。そして、これによって大量に産出された日本銀が東アジアに流出して当地域の政治経済に大きな影響を与え、石見銀山は「ソーマ・プレート」(佐摩銀)の名や「銀の島」日本列島の唯一の銀鉱山として西欧諸国にも知られる存在でした。

島根県教育委員会では平成8年度から現大田市とともに、石見銀山遺跡の解明を目的に総合調査を開始しました。石造物調査もその1つであり、発掘調査や文献調査等とともに継続実施、着実に成果を上げています。

本書は平成16年度に行った石見銀山遺跡のなかの温泉津地区恵珖寺墓地の分布調査の成果をまとめたものです。調査の結果、この墓地には戦国時代から近代までの石造物が20種類388基発見され、石見銀山と関連しながら発展した当地の歴史や特徴を知る上で極めて大きな成果を挙げました。

この間の調査に際しまして御協力いただきました関係の寺院、所有者、そして地元の 方々に衷心からお礼申し上げますとともに、本書が今後の調査研究及び整備活用等に供 されれば幸いに存じます。

平成18年3月

島根県教育委員会 教育長 広 沢 卓 嗣



# 例 言

- 1. 本書は石見銀山遺跡総合調査の一環として平成17年度に実施した、温泉津地区恵珖寺墓地の石造物調査の成果をまとめた報告書である。
- 2. この調査は次の組織で実施した。

#### 石見銀山遺跡調査整備委員会 (平成18年3月31日現在)

田中 琢(元奈良国立文化財研究所長)

田中 圭一(元群馬県立女子大学教授)

田中 義昭(元島根大学教授)

末澤 和政(同和鉱業(株)取締役)

藤岡 大拙(前島根県立女子短期大学学長)

青柳 正規(東京大学教授)

斎藤 英俊(筑波大学大学院教授)

高橋美也子(サンレディ大田館長)

牛川 喜幸(京都橘女子大学教授)

村上 隆(奈良文化財研究所主任研究官)

小林 准士(島根大学助教授)

竹腰 創一(島根県大田市長)

勝部 昭(島根県文化振興財団事務局長)

#### 事務局(平成17年度)

野村 純一(教育庁参事)

山根 正巳(文化財課長) 和田 謙一(同世界遺産登録推進室長)

吉川 広 (同室副主査) 林原 幹治 (同)

 足立
 克己(同主幹)
 中田 行宏(同主幹)

 佐伯
 徳哉(同主幹)
 上代 勇夫(同主幹)

引野 佳幸 (同主任) 太田 俊介 (同主任主事)

中木紗友美 (同嘱託) 祖田 浩志 (同課総括 GL)

西尾 克己 (同文化財 G 副主査) 松本 佳子 (同主任)

#### 調査指導者

田中 義昭(島根県文化財保護審議会委員) 池上 悟(立正大学文学部教授)

宮本 徳昭(石造物調査員) 湯川 登(同補助員)

#### 調査参加者

島根県教育委員会 鳥谷 芳雄(世界遺産文化財登録推進室主幹)

大田市教育委員会 遠藤 浩巳(石見銀山課遺跡整備係長)

長嶺 康典 (同課遺跡調査係長) 中田 健一 (同係主任技師)

尾村 勝(同調査補助員) 松尾 賢二(同) 新川 隆(同)

立正大学考古学研究室 池上 悟(文学部教授)

現地調査参加者 立正大学大学院生 村上 卓 学部学生 沢口 和正

調査員・調査補助 宮本 徳昭 湯川 登

整理作業 高村 玲子

3. 本書に掲載した「第1図」は国土交通省国土地理院発行地形図を一部改変して使用した。

4. 調査においては下記の方々からご協力を得た。

田中 圭一 (石見銀山遺跡調査整備委員会委員) 仲野 義文 (石見銀山資料館学芸員) 加藤 智士 (恵珖寺住職) 多田 英一 小溝大三郎 川北 和子

- 5. 実測図、写真、拓本等は島根県教育委員会にて保管している。
- 6. 一覧表や図版は立正大学考古学研究室が中心となり作図した。 各家の系譜図はあくまで墓碑銘を参考にして想定したものであることを断っておく。
- 7. 本書の執筆者は目次に明記したとおりである。

# 本文目次

Ι	石造物調査の目的・方法・経緯	(鳥谷	芳雄)	 1
П	石見銀山遺跡の位置と歴史	(中田	健一)	 5
Ш	温泉津湊の歴史と廻船問屋	(大門	克典)	 8
IV	温泉津地区の石造物	(宮本	徳昭)	 12
V	恵珖寺墓地の石造物 1. 恵珖寺墓地 2. 廟式墓所 3. 古相の墓石	(湯川 (池上 (池上	悟)	 18
VI	総括	(田中	義昭)	 47

# I 石造物調査の目的・方法・経緯

## 1. 石造物調査の目的

石見銀山遺跡は、中世、特に戦国時代から近世、さらには近代に及ぶ長期間に形成された鉱山産業に関わる遺跡の総体であり、鉱山跡と鉱山町、港と港町、およびこれらをつなぐ2つの石見銀山街道から成っている。この間に鉱山開発・操業の繁栄、停滞、衰退のあったことはおおよそ明らかになっているが、この歴史過程を遺構や遺物の実態に即してより詳細に明らかにし、鉱山遺跡としての特性を把握し、鉱山史に迫ることが求められている。

本遺跡における石造物調査は、上記のような 銀山の変遷を具体的に解明することにあり、 ①人口推移、②活動エリアの消長・人の動き、 ③社会構造の把握を具体的な目的として調査を 実施するものである。

しかし、石造物といっても多種多量なものがあるので、仮に①墓碑、石塔、石仏などの信仰関連石造物、②石臼や要石などの生産関連石造物、③街道沿いの道標などの交通関連石造物、④石切場などの生産地などの流通関連石造物とに分類する。

①の信仰関連石造物は、埋葬関係の遺構群・遺物群の様相には鉱山遺跡を構成する諸要素のなかで鉱山の盛衰がより直接的に反映されていると考えられる。墓地とそれを構成する墓石は銀山の操業に直接、間接に関わった武士、坑夫、職人、商工業者とその家族等の存在ぶりを具体的に物語る資料として重視される。よって墓地の石造物、とりわけ墓石について重点的に調査を実施することとした。

## 2. 石造物(墓石)調査の経緯と方法

墓石調査は島根県教育委員会が石見銀山遺跡 総合整備計画策定のために、昭和59~61年度に 徳善寺跡などについて、天正から慶長年間の紀 年銘が存在する墓石を中心に一部の確認調査が 実施された(注1)。 平成9・10年度には石見銀山遺跡総合調査の一環として、仙ノ山山頂周辺の石銀地区と龍源寺間歩上・妙本寺上墓地を調査した。この調査では、石造物のグルーピングを心がけ、各群の規模と石造物の種類、あるいは消長のアウトラインを押さえるため、紀年銘がある墓石の調査を重点的に進め、後年の本格的な調査に備えることとした。さらに、墓石調査地の選定を発掘調査と連携した結果、天正や文禄年間の紀年銘がある墓石が発見され、古い墓石のある墓石が存在する地区は生活していた時期も古い可能性が高いことが明らかになり、発掘調査の調査箇所の選定にも有効であることが判明した(津2)。

こうした石造物調査の有効性が確認されたことから、調査継続と計画性が石見銀山遺跡発掘調査委員会により指摘され、平成11年度からは以下の3つの調査を総合的に行うこととなった。①鉱山全体の石造物の傾向や変遷を把握し、悉皆調査の必要な箇所を判断する材料を得るため分布調査を実施する。②特徴的な墓地については構造や変遷を把握するために詳細な悉皆調査を実施する。③発掘調査等で得られた成果と関連付けるため、発掘調査地周辺の石造物やその他の資料について関連調査を実施する。

これら3つの調査のうち悉皆調査については ①江戸時代に作られた柵の内に位置し、②群と してまとまりが明確に把握でき、③アクセスが 容易であり、④調査環境が比較的良い条件をク リアした墓地のうち、重点的に本遺跡の最盛期 と言われている戦国時代から江戸時代前半の墓 地を選び、継続的に調査する計画をたてた。

これを受けて平成11年度には立正大学考古学研究室(池上悟助教授)を中心にして妙正寺跡の調査を実施した(注3)。続く平成12年度には職種や年代が明確で、今後の指標となりうるとみられ、かつ奉行・代官墓所もある龍昌寺跡を(注4)、平成13年度には安養寺・大安寺跡・大龍寺跡を調査し、合わせて奉行代官墓所外の調査も行った(注5)。平成14年度はまだ真言宗寺院の調査がなかったため、長楽寺跡の調査を実施

することとなった(注)。平成15年度は悉皆調査は行わず、大森地区の分調査のみを行ったが、これにより長年継続してきた鉱山跡および鉱山町エリアの分布調査が区切りを迎えるに至った。平成16年度は、こうしたことを踏まえ、これまでの分布調査および墓石調査の成果についてまとめたのである(注)。

こうして石造物調査は新たな展開を迎え、今度は周辺部における石造物の実態を把握するに至った。そして、平成17年度からは温泉津地区をはじめることになった。

(注)

- 1 島根県教育委員会·島根県文化財愛護協会『石 見銀山遺跡総合整備計画策定報告書』1987
- 2 島根県教育委員会『石見銀山遺跡総合調査報告 書』第3冊 1999
- 3 島根県教育委員会·大田市教育委員会『石見銀山遺跡石造物調査報告書1一妙正寺跡-』2001
- 4 島根県教育委員会·大田市教育委員会『石見銀山遺跡石造物調査報告書2-龍昌寺跡-』2002
- 5 島根県教育委員会·大田市教育委員会『石見銀山遺跡石造物調査報告書3-安養寺·大安寺跡・大龍寺跡・奉行代官墓所外-』2003
- 6 島根県教育委員会·大田市教育委員会『石見銀山遺跡石造物調査報告書4-長楽寺跡·石見銀山附地役人墓地(河島家・宗岡家)-』2004
- 7 島根県教育委員会・大田市教育委員会『石見銀 山遺跡石造物調査報告書5-分布調査と墓石調 査の成果-』2005

## 4. 調査対象地の概要

今年度は地区内の日蓮宗寺院である恵珖寺の 1か寺のみを対象に調査を行った。

本寺は、南東方向に延びる谷を利用して境内が形成され、町を通る主道からやや後退した位置に表門、鐘楼門、本堂がつづき、奥の墓地へとつながっている。また、本堂前方には正面から向かって右手に庫裡があり、左手の崖上には三十番神堂が建っている。

本寺はもと真言宗寺院として創建されたが、 大永5(1525)年に日蓮宗寺院として再興され たと伝えられる。また、古くは宝塔院と称した といい、天正15(1587)年5月、細川幽斎が九 州への船旅の途中に温泉津に立ち寄り、この寺 (宝塔院) で地元の有力商人たちと百韻連歌を 興行した記録が残る(細川幽斎『九州道の記』 恵珖寺所蔵)。

また、慶長10 (1605) 年の「石州仁万郡温泉津村御縄帳」(多田英一氏所蔵) に「法塔寺」とあり、寛文6 (1666) 年の「温泉津町屋敷公方事廻り帳」(同上) には「恵光寺」とあることから、宝(法) 塔寺から恵光(珖) 寺への改名はこの間と推定されている(斎藤英俊編、温泉津町教育委員会『1999温泉津 伝統的建造物群保存対策調査報告書』1999.3)。なお、昭和8(1933) 年に編纂された『石見六郡社寺誌』には、次のように記されている。

「惠珖寺(日蓮宗) 温泉津町字上町 本尊 釈迦如来、本堂六間四方、境内五百六十 八坪、檀徒二七二人

沿革

大永三年春、加賀国の僧日慈、当郡佐摩村妙像 寺において説教を行った。その節に、当村多田 某、村上某等が、その説教に感動し、日慈を当 所へ招き説教をさせた。信徒また飛躍的な増加 をみた。よって大永五年一字を建て、日慈を住 職とした。後元和四年六月本堂を再建し、鐘楼 門を建て、後更に寛文年間にも再建した。境内 仏堂一字(本尊妙見大菩薩)天保七年六月、当 寺二十五世日昌がこれをたてた。また古く、清 正公の祭りもあった。境内塔頭一字 本善寺(本 尊釈迦牟尼仏)この本尊は元文五年当時日道の 時に建立した。

(原編島根県教育会、1933。小林俊二修訂編纂、石見地方未刊資料刊行会、2000)。

## 5. 温泉津地区の調査研究史

温泉津地区及びその周辺地域におけるこれまでの石造物調査について触れておく。

1997・98年に温泉津伝統的建造物群保存対策 調査が行われ、松井乃生と多田房明が地区内の 石造物を簡単に紹介した<sup>(注1)</sup>。

また、1998年には石見銀山遺跡の総合調査の 一環として港湾調査が実施され、その中で沖泊 地区の石造物調査も行われ、宮本徳昭が成果を 報告した(注2)。

その後、沖泊地区では2002・03年に石見銀山街道調査が、2004年には港湾集落調査が続けて実施された。石造物関係はいずれも宮本が報告を行い(は3)、その成果は石造物調査報告書のシリーズ中にも掲載された(は4)。なお、港湾集落調査では同地区における石切場跡についての報告も加えられた(は5)。

個人の調査研究では、1968年に恵珖寺の五輪 塔墓・笠塔婆をはじめ、温泉津の幸の神、内藤 家の石燈籠、さらには福光石の石工である坪内 家に関する資料などを紹介した伊藤菊之輔の著 作がある(注6)。福光石のことでは石村勝郎の1997 年の著作にも記述がみられる(注7)。

#### (注)

- 1 斎藤英俊編『1999温泉津 伝統的建造物群保存 対策調査』(温泉津町教育委員会、1999.3)
- 2 『石見銀山遺跡総合調査報告書 平成5年度~ 10年度 第6冊-民俗調査・港湾調査・街道調査ー』(島根県教育委員会外、1998)
- 3 宮本徳昭「沿線と周辺の石造物」『石見銀山街道-鞆ケ浦道・温泉津沖泊道調査報告書』(島根県教育委員会2003.3、及び宮本徳昭「集落と周辺の石造物と石材」『石見銀山街道-鞆ケ浦・沖泊集落調査報告』島根県教育委員会、2004.3)
- 4 宮本徳昭「沖泊・温泉津地区の石造物」『石見 銀山遺跡石造物調査報告書5-分布調査と墓石 調査の成果-』(島根県教育委員会外、2005.3)
- 5 鳥谷芳雄「沖泊・鞆ケ浦における繋留遺構 付 沖泊の石切場跡他調査報告」『石見銀山街道 一鞆ケ浦・沖泊集落調査報告』(島根県教育委 員会、2004.3)
- 6 伊藤菊之輔『石見の石造美術』1968
- 7 石村勝郎「福光石彫刻の遠祖萱谷九郎右衛門」 『石見銀山 戦国の記』1997

第1図 調査対象地位置図 (●印が恵珖寺墓地、1/50,000)

# Ⅱ 石見銀山遺跡の位置と歴史

## 1. 遺跡の位置と環境

### (1)銀山の位置と地質学的背景

島根県は東西に長く、日本海に面して600kmに及ぶ海岸線を有している。旧国では出雲、石見と島嶼の隠岐の3国からなり、石見銀山は「石見国」の東側いわゆる「石東」といわれる地域に位置している。

出雲では、斐伊川をはじめとする河川によって、ややまとまりのある沖積平野が形成されている。これに比して石見では、江の川や周布川等の河口近くに平野は広がるが、海岸に至る山地帯によって沖積平野は広大には広がらない。海岸部に近い山塊群に象徴されることにより、「石海」や「石美」あるいは石群に石見の語源があるともいわれている。

山陽と山陰を隔てる中国山地の山並みから派生した山地帯には、石見南部特有の高原地帯がひろがり、断魚渓や千丈渓といった瀑布線によって急激な高低差を見せる。加えて三瓶山(標高1,126m)や大江高山(標高888m)などといった火山が分布し、山地帯とその間を縫う河川によって形成された小規模な可耕地や小集落が多く点在している。銀山の面影を伝える大田市大森銀山伝統的建造物群保存地区も、こうした狭長な河岸段丘上に形成されている。

石見銀山遺跡の中核をなす仙ノ山(標高538 m)は、大江高山から北へ4km、日本海から直線距離にして8kmの地点に位置する。大江高山は大山火山帯に属し、前期更新世に活動した火山といわれ、溶岩ドームのまとまりからなっている。仙ノ山はこの大江高山火山岩類の分布域にあり、角礫化火山岩やデイサイトの貫入岩体、凝灰角礫岩等を鉱脈の母岩とする。鉱脈には鉱染鉱床型の福石鉱床、鉱脈鉱床である永久鉱床、という2つの鉱床が賦存していることが知られている。福石鉱床の鉱石鉱物としては自然銀、菱鉄鉱を主体として、黄銅鉱などの含銅硫化鉱物をほとんど含まないとされる。また永久鉱床の鉱石鉱物は黄銅鉱、黄鉄鉱を主体

とし、輝銀鉱、自然銀などが含まれる。

#### (2) 歷史的背景

石見銀山遺跡は、周辺の歴史においても地形的な要因から石見独特ともいえるような特色を有している。以下に石見銀山周辺の歴史的な環境を概観してみたい。

縄文・弥生時代では、石東では発掘調査による資料が乏しかったが、近年の調査によって次第にその様相が明らかとなってきた。仁摩町古屋敷遺跡は、潮川の河岸に形成された遺跡で、縄文時代晩期~弥生時代前期の遺物が土坑中から一括出土し、貴重な資料となった。潮川沿いには他に弥生時代の円形杭列が検出された川向遺跡が知られる。大田市鳥井南遺跡は日本海を望む丘陵上に展開した遺跡で、弥生時代から古墳時代の竪穴住居跡が多数検出されている。

9、10世紀代の遺跡では、緑釉陶器が出土した仁摩町殿屋敷遺跡や円面硯の出土した大田市八石遺跡が注目される。これらの遺跡は、中世前期の貿易陶磁をも出土していることに加えて、河口に近い河岸という立地から、海上交通の存在を予感させるものである。

こうした海岸部の遺跡の他に、仙ノ山から南西方向へ約1kmの地点に位置する白坏遺跡では古墳時代の住居跡の他に、奈良平安期の建物跡や木簡が多数出土している。

平安末期には、石見銀山周辺を包括する大家 荘という大規模な荘園が成立していることが知 られており、その後、中世には石見銀山周辺に 多くの荘園、国衙領が成立する。南北朝期には、 周防・長門の守護であった大内氏が石見の守護 となるが、応永の乱の後に石見守護職を没収さ れる。しかし大内盛見は邇摩郡を分郡として与 えられ、この分郡知行は大内政弘の代にも引き 継がれることとなった。永正(1504~1521)段 階に至ると大内義興が石見一円の守護権を取り 戻し、大内氏の支配下のもとに石見銀山が本格 的な開発が行われたといわれている。

戦国期には大内氏と尼子氏、そして毛利氏に よって銀山領有をめぐって争奪が行われ、その 結果多数の城館が周辺に遺されている。江戸期に入ると安濃郡と邇摩郡は直轄支配され、明治維新後には大森県が置かれた後に浜田県となり、明治9(1876)年には出雲、隠岐、石見からなる島根県が設置された。

## 2. 石見銀山史抄

#### (1)発見から灰吹法の導入

石見銀山は、延慶 2 (1309)年に大内氏によって発見されたという伝承が残る(『銀山旧記』、以下「旧記」という)。発掘調査では、近年、相次いで須恵器が出土している。資料整理中ではあるが、石見銀山遺跡宮ノ前地区では、江戸初期の建物跡を遺跡の主体としているが、埋土中あるいは地山直上面に古墳時代後期ごろの須恵器が採取されている。また、仙ノ山山頂でも須恵器が発掘調査によって小片かつ少量ながら検出されている。

大内の発見伝承に対して、16世紀初頭に博多商人の神屋寿禎が行う本格的な開発との対比から、神屋の開発を、再開発や再発見と表現することが一般的である。

神屋寿禎の開発は、出雲鷺銅山の山師三島清 右衛門とともに金堀(穿通子)の吉田与三右衛 門、吉田籐右衛門、於紅孫右衛門らによって、 大永 6 (1526)年に始めたと「旧記」では伝える。

発掘調査の成果では、再開発を前後する時期の遺物も検出されている。栃畑谷Ⅱ区下層確認トレンチ内のSD02より出土した遺物がそれであり、時期は数点を除いて15世紀後半から16世紀中葉までの範囲内におさまるものである。他に14世紀後半から15世紀初頭の年代観が与えられる中国製の青磁瓶の破片も出土しており、これは伝世品の可能性が指摘されている。

石見銀山史において大きな画期となった灰吹法の伝来は、天文2 (1533) 年といわれる。「旧記」ではこのことについて、「天文二年大内復銀山を取返して ~略~ 此年寿亭博多より宗丹桂寿と云ものを伴い来り八月五日相談し鎖銀と石と相雑ものを鎖と云、を吹溶し、銀を成す事を仕出せり、是銀山銀吹の始り也」とある。『お

べに孫右衛門えんき 一名 銀山旧記』(以下、「おべにえんき」という)では、「白銀吹き初め候事、天文二年八月十五日 九州博多より慶寿と申禅門参られ吹申候」という。慶寿については、先の「高野山浄心院往古旦家過去帳姓名録」に「出し土 慶寿 十五日」と記載があり、実在の可能性が推定されている。

灰吹法の伝来元である朝鮮ではそれ以前に、 銀産統制のもと民間で日本鉛を使った灰吹法に よる銀鉱石の製錬が行われており、その禁を犯 した朝鮮人が処罰されたという。(『李朝実録』)

博多の商人神屋寿禎は、大内の庇護の元で半島との交易を通じて技術の導入を試みたともいわれる。いずれにしても、灰吹法の導入により石見銀山の産銀が飛躍的に伸張していくこととなった。その例として、同じく『李朝実録』では、1538年、「倭人は銀だけを持ち他のものは持ってこない」という記載をはじめ、1542年、「倭国で銀を造り始めて10年にもならないのに倭銀が我が国に流布し、既に賤物となっている」ことや銀80,000両の貿易を日本国王使僧安心が朝鮮に求めている記事を伝える。

中国においても、スペイン船、ポルトガル船 によってもたらされる南米のポトシ銀山産の銀 が流入する前に、福建のジャンクによって日本 の銀が買い付けられたといわれている。

また、1552年フランシスコ=ザビエルがロドリゲス神父に当てた書簡には「カスチリア人はこの島を銀の島と呼んでいる」と紹介しており、日本の産銀の増大が知られる記事である。

#### (2) 争奪戦と徳川の掌握

石見銀山の争奪戦をめぐっては、原慶三氏によって、当初から大内氏の支配下にあり、謀反による大内自害に乗じた弘治2(1556)年から永禄4(1561)年まで、尼子氏が銀山を領有。その後、毛利の支配下に入る、とされている。

毛利氏は温泉津を直轄地として、銀山を「温泉銀山」「銀山温泉津」と称した。また、幕府と朝廷に料所として寄進、朝廷に対して毎年上納を続けていたという。詳細な生産高は不明であるが、「銀山納所高辻」(『毛利家文書』)によれば、毛利氏直納分として1年間で都合33,000

貫あまりあったという。

本能寺の変の後、秀吉は毛利と和議を結び、 その後、文禄元(1592)年、慶長元(1596)年 の朝鮮侵略に際して石見銀で大量の石州御公用 銀を造り、その戦費としたといわれている。

関ヶ原の戦の後、石見銀山は徳川氏の管轄に 置かれることとなり、荷分制と甲州流といわれ る鉱山技術によって鉱山経営に長けた大久保長 安による銀の増産が行われることとなった。

石見銀山遺跡には、墓石を中心として数多くの石造物が残されているが、近年の石造物調査によって、従来天正年間を最古としていた墓石の年号が、元亀3(1571)年に遡ることが知られるようになった。また、銀山全域の悉皆的な調査は未了ではあるものの、墓石の数的ピークは、おおよそ1600年頃と1800年頃にあると提起されている。

#### (3) 江戸期の石見銀山

石見銀山は慶長から寛永期に最盛期を迎える。なかでも山師安原備中が開発した釜屋間歩は毎年3,600貫の銀を産したという。

銀山経営を支える仕組みとして、元禄年間 (1688~1704) 頃より石見銀山領の村々のうち 佐摩村を中心とした周辺の邇摩郡・安濃郡・邑 智郡に銀山御囲村32ケ村が設定され、坑内の支柱 (栗材) や精錬や坑内作業に必要な炭、縄、 
吸などを供出することが義務付けられた。それ 
ぞれの坑道の経営方法は慶長初期頃から奉行所 
(代官所)直営の御直山と、山師の請負山であ 
る自分山があった。御直山の経営は公費から資 
金・資材が提供され、鉱石を一定の割合で公 
儀・山主・銀掘りに荷分けされるもので、その 
割合は時代により変遷があった。

江戸期を通じて奉行・代官・預りが59人あり 石見銀山附御料約48,000石の統治と銀山の管理 をおこなっている。寛永期(1624~1644年)以 降になると次第に坑道が深くなり、湧水処理に 経費がかかるようになり延宝年間(1673~1680) になると産銀量は年間約400貫に減り、幕末の 安政6年には30貫と記録にある。元禄4(1691) 年には間歩数92の内63が休山、正徳4(1714)年 には、127の内75、享保14(1729)年では、129 の内74、文化13(1816) 年では277の内247、天 保15(1844)年285の内251が休山となっている。

#### (4) 近代の鉱山開発

明治維新後、石見銀山は太政官布告により地元に払い下げられ小規模な経営が続けられたが、明治5(1872)年の浜田沖地震で坑道はほとんど水没し、全山休山状態となった。明治19年合名会社藤田組が1鉱区の借区権を買取り、翌20年には全鉱区を買取り、仙ノ山南の銀山部(本谷鉱区)で採掘が開始された。この時から大森鉱山となり、鉱山事務所を銀山部におき、24年からは仁摩町柑子谷の永久部(永久鉱区)に製錬所が建設された。28年には清水谷に新製錬所が建設され操業を始めたが、翌29年に良鉱が得られなかったことなどにより、休止することになった。開発の中心は永久部となり、同35年には発電所を建設、電動式ポンプによる揚水で再び活況を呈した。

主要産品は銅で、日清・日露戦争の軍需景気に乗り隆盛をみた明治後期から大正初期には、柑子谷は一大鉱山町に発展した。大正6年(1917)の大森鉱山の従業員は約700名であったと記録されている。しかし第一次世界大戦後の反動景気により銅価が下落、その上安価な外国産銅におされ、ついに大正12(1923)年6月に休山に追い込まれた。昭和16(1941)年国の援助で再開発をおこなったが、同18年山陰地方を襲った大水害により、柑子谷は地形が変わるほど土砂が堆積し、坑道も水没して再開発は断念され、現在に至っている。発掘調査では、「藤田組大森鉱山」と書かれた陶磁器が栃畑谷地区、出土谷Ⅱ区で出土しており、栃畑谷Ⅱ区では製錬施設とそれに伴う坑道が検出されている。

(中田健一)

# Ⅲ 温泉津湊の歴史と廻船問屋

## 1. 温泉津湊の概観

温泉津湾は大江高山火山群が日本海に押し寄せ、複雑に入り組んだリアス式海岸の奥深い入り江である。

日本海に向かって北西に開口した湾の入り込みは深く、幅は約450m、奥行は約1,100m、海の深さは波止場周辺で6mとなっている。湾の入り口では、東側に櫛島(標高28.5m)、西側に大崎鼻(標高29.6m)が対峙しており、天然の防波堤となっている。



### ▲温泉津湊を示す範囲

文政13 (1830) 年「温泉津村明細書上帳」(多田家文書)によると、およそ温泉津湊は「湾口四町、浜湾口迄十一町余」をその範囲としたが、この「湾口四町」とは、この櫛島と大崎鼻を結ぶ直線距離を示すものである。この範囲には沖泊浦・日村・温泉津浦・小浜浦・波路浦の5浦が存在したが、うち日村を除く4浦を「温泉津四箇浦」と唱え、近世期にはこれら浦々を総称して「温泉津湊」と呼んだ。

## 2. 温泉津湊 (港) の成立と発展

弘安4 (1281) 年、元冠に備えて石見十八砦 の1つが櫛島に築かれたと伝えられているが、 温泉津湊の成立について明らかに出来る史実 は、永禄4 (1561) 年、毛利元就が石見銀山防 衛と出雲の尼子氏攻略のため、吉川元春を温泉 津へ進駐させ、兵糧調達・輸送の準備を命じたことである。吉川元春は温泉津周辺に配下の武将を配置し、温泉津湊整備のため、永禄13 (1570) 年鵜丸城を築かせた。こうして、温泉津湊は毛利元就の出雲、石見支配の拠点、特に物資、人員の調達、輸送の基地、つまり軍港、兵站基地としての役割を持ち、港としての成立の基礎を築いた。しかし、温泉津湊の本格的な発展、町並みの形成は関ヶ原の戦(1600)以後、石見銀山が徳川氏の直轄領となり慶長6 (1601) 年8月、大久保石見守長安が銀山奉行として大森に着任してからである。

### ①石見銀山外港時代(慶長~元禄年代)

この年代は慶長6 (1601) 年より元禄年間 (1700年代) に至る約100年間で江戸時代初期から中期にいたる時代である。銀山は慶長年間から寛永年間 (1630年代)、銀の産出量が多く年間3,000貫(約11t)に達し、「銀山大盛」といわれる程であった。大久保石見守は銀山経営の一端として、温泉津の「町場作り」「港作り」に力を入れ、慶長10 (1605) 年温泉津町屋敷地136所(2町5反6畝10歩)に対し、「地銭免除」の特典を与え、町場の形成を奨励している。

慶長年間の数年ほど銀山の灰吹銀は温泉津湊 から海路で大阪へ廻送されたが、遠距離の海上 輸送の危険性から、大森・尾道間の銀山街道が 開発され、陸上輸送に変更されたため、温泉津 湊から銀の積出は行われなくなった。しかし、 銀山で消費される、炭・薪・米・麦・食料・雑 貨品等、「銀山御蔵入物」の陸揚地の機能は強 くなり石見銀山の外港として重要な港湾となっ た。慶長10(1605)年3月2日から翌慶長11 (1606)年2月13日までの1年間に益田、三隅 から14,000俵の木炭が灰吹用として陸揚げされ ている。温泉津湊からは、駄馬・牛等で松山・ 清水・西田を経て銀山まで輸送された。温泉津 湊の「入津船」が増加するに伴い、温泉津、小 浜にも「船持」業者が出るようになった。寛永 年間(1637年ごろ)温泉津湊に12艘の廻船があっ た。(寛永14年・多田家文書) 寛文12 (1672) 年 河村瑞賢が日本海西廻り航路を開き、佐渡の小木・能登の福浦・但馬の柴山・石見の温泉津・長門の下関・大阪、紀伊の大島・伊勢の方座・志摩の安乗・伊豆の下田を寄港地とした。また、天和年間(1681)ごろより銀山領の御城米が大阪へ廻送されることとなった。旧邇摩郡西部・旧邑智郡・旧那賀郡の御城米は温泉津湊、旧安濃郡と旧邇摩郡の一部は大浦湊から積出しされた。温泉津湊近くには、御城米を一時的に保管する蔵が建てられていた。(文政3・村差出明細書上帳・中島家文書)

## ②北前船時代(元禄年間(1700年代)~明治20 (1887)年)

近世中期(1700)頃から近代初期(1887年)の約190年間は、北前船の活躍により流通経済が大きく変る時代であった。特に1700年代中期は、「北前船」が日本海沿岸で最も活躍した年代である。特に、1700年代中期は、北前船商法と言われる買積方式が確立した。北前船は北陸の湊に根拠地を定め、日本海沿岸を航行し、指定した寄港地で地場産品を買積し、その積荷を各地で販売する商いを主とした。そのため寄港地は急速に整備され、北前船の入津によって湊(港)は賑わい、町には商家や問屋が立ち並んだ。

宝永年間(1705年代)から、越前、加賀、能 登、越中、越後の船が温泉津湊へ入港したこと が見られる。(多田家・客船帳)これに対し、寛 政9(1797)年ごろから和泉、摂津、紀伊、但 馬、讃岐、小豆島などの廻船の入港が多くなっ ている。(中島家・客船帳) 瀬戸内・近畿の廻 船は「上方船」と呼ばれることもあった。また、 この時代から、石見の廻船(神子路、宅野など) も活躍し「地船」と呼ばれた。温泉津に入津し た廻船は弁財船型が多く、100石積(10石を約 1tと換算)から500石積の大きさの船が多かっ た。廻船の出立国は問屋によって多様であった。 廻船の温泉津入港は、19世紀(1800年代)、ま すます盛んになっていく。この時代は幕末から 明治初期にあたり、政治、経済の両面で近代化 された時代で、温泉津湊もこの影響を強く受け ることとなった。19世紀中期(1840年ごろ)か

ら、温泉津丸物(陶器甕)の生産が始まり、北 前船によって北陸方面に販路が拡大し活況を呈 したが、明治20 (1886) 年ごろから洋式帆船・ 汽船が普及し、加えて鉄道が開通したことによ り、従来の北前船商法(買積方式)は廃れた。 ③帆前船、機帆船時代(明治20年代(1886)ご る〜昭和初年(1930)ごろまで)

明治に入って北前船の衰退により活況を失っ た温泉津湊は、明治30年代(1898年)以降、再 び活況を取り戻す。その理由は、大陸市場への 経済進出が進んだことで、帆船・汽帆船による 海運業が急速に発展したことである。温泉津で も、明治28 (1895) 年小林富太郎が西洋型機帆 船の建造工法を導入し造船業を開始している。 明治30(1897)年ごろから昭和初期(1930年ご ろ) の間、湯港、温泉津(含・小浜・波路浦・ 沖泊)・福光(含・今浦・吉浦)に約40隻余り の運搬船(帆前船・機帆船)が活躍していた。 温泉津町内の運搬船は、木造船で総 t 数20t か ら120tの小型船であったが、東北、北陸から 北九州、更に、朝鮮半島まで運航し、温泉津港、 温泉津町場は空前の活況を呈していた。幕末か ら明治20年代は北前船の最盛期、その後、明治 30年ごろから昭和初期までの大型機帆船の普及 によって、温泉津港は、陶器甕、福光石材、加 工品、瓦、石見半紙、海産物の積出港として、 運搬船の出入が続き、温泉津の黄金時代であっ た。



▲ **龍御前神社に奉納されている船絵馬** 弁才船(べざいせん)と呼ばれ、北前船の主力 であった。

## 3. 温泉津の廻船問屋

江戸期の温泉津湊は、石見銀山への物資に加え、御城米の津出港として、また西廻り航路の寄港地として、近世期には日本海水運の拠点として大いに発展した。同時に、中世末に誕生した問屋は、こうした日本海水運の発展に伴って繁栄し、江戸期には10数軒もの問屋が経営を営むようになった。温泉津の問屋は、銀山龍園とでの生活物資(「銀山御蔵入物」)を扱う一方、2000 を扱う一方、2000 を扱うになった。温泉津の間屋は、銀山龍園の大路の「銀山御蔵入物」)を扱う一方、2000 を扱う一方、2000 を扱う一方、2000 を扱うである。温泉津の間屋は、銀山御蔵入物」)を扱う一方、2000 を扱うである。温泉は、2000 では、積出、2000 では、積割の提出等の業務があった。問屋の業務は、総合商社的な営業面と、廻船に対しては、検察的な責務も課せられていた。

元和5 (1619) 年11月に蔵方衆から温泉津老中に対して提出した請証文によると、この頃の問屋として以下のような名前を見ることができる。

中井吉右衛門 森山茂左衛門 高屋四郎左衛門 木村正左衛門 角喜兵衛 安川三郎兵衛 生越四郎右衛門 横路伝左衛門 中尾藤左衛門 来海五郎右衛門 田原源左衛門 高津屋孫三 竹屋小左衛門 綿屋新左衛門

この資料では蔵方(問屋)として14人の名前が見えるが、この他に温泉津老中である油屋三郎左衛門・松浦平兵衛・河村市左衛門・中嶋平右衛門等の面々も家業としては問屋を営んでいるため、このころの温泉津にはおよそ18軒程度の問屋があったものと思われる。

寛文12 (1672) 年、温泉津湊は西廻航路の寄港地として指定され、温泉津の問屋は北前船の物産の収集・販売・乗組員の宿泊などの業務を行い、各地の船の現地事務所として機能し「蔵宿」と呼ばれた。問屋は16世紀末、毛利氏支配時代に定着したもの(木津屋)もあるが、近世中期に定着し、開業したものが多い。問屋には取り扱う廻船が定められており「本宿」と称され、関係する国名を屋号とすることが多かった。

問屋衆は、基本的に温泉津町の中にその居宅や蔵を構えた。例えば、「元禄5 (1692) 申年温泉津町屋敷絵図 (写)」(以下、元禄の絵図) (多田英一氏所蔵) および同年「温泉津町屋敷覚」(島根県立図書館謄写本)を基に、問屋の屋敷地について整理したものがある。問屋は主に、中町より西側に存在し、多くは水揚げや積み出しの便利な湊付近に集中している。とりわけ油屋(多田家)・木津屋(中嶋家)・高津屋(増野屋)・加賀屋(中尾家)・梅田屋(梅田家)・川村屋(川村家)等の有力問屋層は、湊付近のいわゆる1等地を占有している。

廻船の入津は年々増加し、温泉津湊に多量の 物資が陸揚げされ、物流が活発になるにつれて、 問屋が増加した。

宝永4(1707)年、「問屋中定之事」(多田家 文書)には次の16問屋が名前を記している。

油屋八良右衛門 油屋吉右衛門 木津屋平左衛門 河村屋十郎右衛門 高津屋五右衛門 唐津屋伊右衛門 加賀屋藤左衛門 梅田屋喜右衛門 高津屋源四郎 越前屋宇右衛門 油屋儀兵衛 米屋利右衛門 油屋又七 高津屋三郎右衛門 川村喜兵衛 米屋安蔵

享保6 (1721) 年には、越後屋佐右衛門、長崎屋宗左衛門、因幡屋源七の3軒が追加され19 間屋となっている。

享保18 (1733) 年には、次の10軒が追加され 29問屋となっている。

大坂屋五右衛門 丹後屋市左衛門 有馬屋久兵衛 堺屋市右衛門 泉屋甚右衛門 但馬屋儀兵衛 福田屋忠三郎 伊万里屋喜兵衛 豊後屋理右衛門 大黒屋儀右衛門

その後も増え続け、延享2 (1745) 年には約40軒の問屋があり、温泉津の問屋はピークを迎えた。問屋の中には同一の屋号を持つものがあるが、親子又は分家と考えられる。

問屋には取り扱う船が決まっており、木津屋 は加賀・越後・越前が多く、佐渡・丹後・若 狭・出羽なども扱った。油屋は出雲・和泉・大 坂・石見・丹後、加賀屋は周防・長門・紀州、 備前屋は隠岐が多かった。これに対して、但馬 屋は出雲・杵築・浜田などの「地船」が多かっ た。

しかし、これだけ問屋が増加すると、競争が 激しくなり「抜け駆け」売買などの事件が発生 し深刻な問題となった。そこで、船表番所の申 渡しにより、「問屋中定之事」を申し合わせ、問 屋仲間の取り締まり及び仲裁に取り組んだ。

明治に入ると、近代化の波が押し寄せたため、 北前船商法は衰退し、呼応して問屋の形態も変 化し軒数も減少している。

平成9・10(1998~1999)年に、温泉津で実 施された、重要伝統的建造物群保存対策調査の 報告書の中に、大正時代の温泉津の家並みを現 在の図面を使って復元したものが掲載されてい る。元禄の絵図と比較すると、当時の地割りと ほとんど変っていないことがわかる。そこには、 船問屋、仲仕、付舟、船乗り、船具店など、港 ならではの職種を営むものも多く、これらは港 に近い沖浦と本町に集中している。廻船問屋関 係では、商船として木津屋、船間屋として津和 野屋・長野屋・川内・梅田などが見られる。特 に木津屋の中嶋家は、大正2年に発行された「温 泉津案内」によると、大阪商船温泉津荷客扱所、 八束貯蓄銀行温泉津代理店、各種保険を扱う代 理店を行なっている。梅田は江戸時代に勢力の あった廻船問屋「梅田や」であると推測される が、元禄の絵図と比較すると、所有地数などか なり縮小している。

これとは別に、江戸時代初期後半より登場する廻船問屋「油屋」を起源とする「浜の油屋」が記載されている。大正時代には現在と同じ場所で家業を営んでいる。

これらは、元禄の絵図に登場する問屋で、江 戸時代中期より現在までの推移が伺える数少な い問屋である。

元禄の絵図で、中町付近(家並みの中ほど)にまで見られる廻船問屋は、大正時代には小売業の立ち並ぶ商店街へと移っているが、屋号に地名が入っている商店は廻船問屋のなごりと推測される。

江戸時代中期にピークを迎えた温泉津の廻船 問屋は、幕末以降、全国的な北前船の衰退と流 通経済の近代化により、従来の問屋業が成り立 たなくなった。そのため、交易や宿泊といった 廻船問屋の業態を活かしながら、小売業や旅館 業に転じ、明治に入ると急速に姿を消していっ たのである。

(大門 克典)

#### 参考文献

『温泉津町誌』上巻・中巻 温泉津町

『石見銀山街道 鞆ケ浦・温泉津沖泊道調査報告 書』島根県教育委員会

『1999 温泉津 伝統的建造物群保存対策調査報告書』温泉津町教育委員会

#### (註記)

- 註1…御城米 (ごじょうまい)/幕府直轄地 (天領) から年貢として徴収された廻米のこと。江戸へ廻送される御城米は旗本・御家人の俸禄的な支出に使われ、京都二条・大阪・駿府・甲府・佐渡・長崎・大津などへは常備米として「御蔵」に保管された。
- 註2…旧邇摩郡、旧那賀郡、旧安濃郡は昭和29年の 市町村合併以前の枠組みで、文中の大浦湊は、 現在の大田市五十猛町大浦である。
- 註3…御城米などの廻米(かいまい)を運ぶ船。
- 註4…重伝建保存対策調査の一環で行われた聞き取り調査により復元した図。対象者は温泉津在住の坂根清太郎氏(M37生)、本山保孝氏(M41生)、福田清子氏(T9生)である。
- 註5…仲仕(なかし)/湾港などで、船の貨物をかついで運ぶ作業員。「沖一」
- 註6…付船(つけぶね)/未知の水域や困難な水域 を航行するための水先案内人。

## Ⅳ 温泉津地区の石造物

この地域の石造物は、宝篋印塔・一石宝篋印塔・五輪塔・一石五輪塔・無縫塔・地蔵像・板碑様石仏(仮称)・題目塔・角塔・燈籠・鳥居・井戸枠・石垣・石段・くり込み穴(仮称)等がある。これらの石材は、約5km南東の地から産出される安山岩質凝灰岩である「福光石」である。数点他地域産の花崗岩と出雲地方産出の「来待石」がある。在銘最古は、沖泊地区への街道脇を少し登った墓地にある天正2(1574)年の一石五輪塔である。

沖浦浄土宗西念寺奥街道脇に石窟があり、伝 松浦氏初代と2代の福光石の中の「オオバタ石」 (細目) 製の大型宝篋印塔3基が安置されてい る。総高175cm・隅飾幅52cmを測り、ほぼ同 規模である。

銀山柵内に数基あるが、街道脇にくり込み穴 (仮称)が39基ある。平面形は、丸形と方形、奥 側は半分天井があり、周囲に雨樋様の溝が巡っ ている。一部は、覆いを架けたと推定される穴 もある。本来の目的は、不明である。

寺院は、6箇寺あるが、それぞれの詳細な調査は実施されていない。以下、現在判明している中で特徴的な事柄を記述する。

沖浦浄土宗西念寺には、総高約97cm・隅飾幅約33cmの宝篋印塔9基、総高約78cm・火輪幅約28cmの五輪塔2基が整然と並んでいるが、各部材の方向は不揃いである。五輪塔の紀年銘は、「享保」と読める。並んで灰白色系花崗岩製角塔2基がある。寺僧墓地には、宝篋印塔6基・一石宝篋印塔1基・一石五輪塔1基・板碑様1基・地蔵像と推定される小像多数が混在している。寺の脇を通る沖泊への岩盤削り出しの街道は、幅約1m・長さ約250m、寺側溝幅約0.6m・深さ約0.6m、崖側溝幅約10cm・深さ約5cmである。旧玄関前には、街道崖に2基の馬繋ぎ石がある。

寺町真言宗金剛院には、寺僧墓地に角塔以前の石塔が数基みられる。平面形が丸形と方形の井戸枠が各1基ある。特に方形枠は、外形1.50m四方、幅1.05m・高さ0.55mの板石を使用し、

3段以上積み重ねている。

温泉町浄土宗西楽寺には、灰色系花崗岩製角 塔2基がある。文政10 (1827) 年在銘と天保9 (1838) 年在銘である。銘文から商家のものと 推定される。庫裏後側には、削り出し石段と積 み上げ石垣があり一見の価値がある。

温泉町日蓮宗恵珖寺には、初代銀山奉行大久保長安の逆修墓が文化9(1812)年に角塔形式で再建されている。本堂前には、総高約210cmの燈籠1基がある。寛政4(1792)年在銘、「寄附主大森□(欠失)/河北正平妻富」・「石工/平七」と読める。山門脇から数種の積み方の石垣に沿って行くと墓地に着く。別稿で詳細な記述があるので概略とする。廟式墓地が中央にあり、取り巻くように角塔群がある。元の位置とは反対側に集積された角塔以前の石塔が約50基前後ある。この中に1基ある大型の宝篋印塔は、柵内大安寺内のものにつぐ大きさである。上方斜面にも数基通常規模のものがある。

温泉町浄土宗龍澤寺は、数種の積み方がみられるが立派な石垣で敷地としている。高い所は、約3.35mあり、L字状の長さ約50mに及ぶ。

温泉町温光寺は、石畳に特徴がある。参道は、 長さ約11m・幅1.78m、48cm四方とこれを対角 に1/2の菱形状に組み合わせている。幅約 21cm・長さ約96cmを縁石として並べ、欄干用 の丸穴があるが、今は欄干はない。門の前には、 安政2(1855)年在銘の燈籠が1対ある。境内 は、数種類の板石を使い不規則ながら趣のある 石畳としている。

神社の中では、3社で簡単な調査をした。沖 浦愛宕神社には、初代銀山奉行大久保長安の逆 修塔で再々建の五輪塔がある。傍に前の塔の宝 珠がある。

稲荷町稲荷神社には、削り出しの参道と石段がある。参道崖には、継ぎ石と推定されるくり込みが3箇所確認できた。

中町龍御前神社には、特徴のある石造物が多い。鳥居は、享保16 (1731) 年在銘、「備前尾道藤原氏迫石工畑清三郎作」・「奉献温泉津氏子

中」と読め、白色系花崗岩製である。総高(反り含む)約3.9m・笠木幅約4.15mを測る。銘から瀬戸内産の石材と推測できる。燈籠では、文久2(1862)年在銘・明治20(1887)年在銘・年号不明の3基は、福光石製である。明治20年在銘のものは、「但馬」・「周防」と読め、他地域の船主の寄進である。大正2(1913)年在銘の1対は、来待石製である。大正9(1920)年在銘は、白色系花崗岩製である。本殿脇から削り出しの石段や階段を登ると奥の院となる。参道は、削り出しの溝がある。長さ約15mの平面形凸状の石垣で境内が造られている。最も高い所で約2.4m、欄干もあり、ここからはこの地区の大半を見ることができる。

共同井戸の調査も少し実施した。上町では2基、方形のもの185cm四方、丸形のもの径110cmを測る。この地区では、方形最大と推定される。丸形のものの縁は、丸く削られている。法泉町例は、150cm四方の方形である。沖浦例は、径95cmの丸形である。周囲は、80cm×36cmの板石を元は12枚以上敷き広場としている。

石垣は、約13箇所調査した。道路1箇所・墓地6箇所・寺院2箇所・神社1箇所・その他3箇所である。各種多様な積み方があり、一連の中にも積み方に違いがある。特に壮観なものは、既述の龍澤寺と西楽寺、そして龍御前神社奥の院がある。また、上町の道路脇のものは、各種多様な積み方があるが、1部分この地区では珍しい積み方をしている。

石段で特徴的な所は、西楽寺・龍御前神社奥 の院・稲荷神社がある。

白色系花崗岩製角塔1基が、金剛院の谷と温泉街との間の丘陵上の墓地にある。文化2 (1805) 年在銘である。形態は、沖泊にあるものとよく似ている。

内藤家には、種々の石造物がある。特異なものとして、「朝鮮燈籠」と「六角燈籠」の2基である。いずれも花崗岩製である。六角燈籠は、「太閤石」と呼ばれている。

上町の松山方面への分岐点には、「井戸正明君」碑がある。高さ195cm・幅20cm・厚さ50cmの自然石製である。碑文面は、平面仕上げとし、

明治16 (1883) 年に再建された。「福光石工坪 内和七」と刻まれている。

上町上端に「忠左衛門堂」がある。珍しいものとして小さい題目塔1基が安置されている。この付近には、集められた地蔵像群が2箇所ある。

この地区の特徴として、各家の背後は「石切場」となっている。石切場と家のための造成が同居している。他地域の石材が入ってくるのは、沖泊の方が古く、在銘最古のものは、この地区のようである。

なお、本稿は、既調査報告書及び平成15年に 調査された「環境物件・工作物」の結果を基と した。

(宮本 徳昭)

#### 参考文献

- ・『石見銀山街道 鞆ヶ浦道・温泉津沖泊道調査報告書』(島根県教育委員会、2004.3.)
- ・『石見銀山遺跡石造物調査報告書5-分布調査と 墓石調査の成果-』(島根県教育委員会・大田 市教育委員会、2005.3.)
- ・「環境物件・工作物」平成15年調査資料(未発表、 島根県邇摩郡温泉津町教育委員会)
- · 『1999温泉津伝統的建造物群保存対策調査報告書』 (島根県邇摩郡温泉津町教育委員会、1999.3.)

## V 恵珖寺墓地の石造物

## Ⅴ-1 恵珖寺墓地

## 1. 恵珖寺墓地と石造物分布

恵珖寺墓地は、本堂裏の南東方向に緩やかに勾配のついた谷筋に位置し、およそ65m×20mの範囲に形成されている。大まかに分けて3段で構成され、本堂側の段の北東側には、改修時の古い墓が20m×1.5mの範囲で寄せ墓になっている。中段の南西側の崖上には、旧越後屋墓所が3.5m×2.5mで形成されている。本堂の北東側には、参道を挟んで隣接する様に歴代住職の墓地が30m×3mで形成されている。

## 2. 確認できた石造物の概要

恵珖寺墓地で所在が確認できた石造物は、20 種類で総数388基である。このうち主体をなす のは、墓標系であり、円頂方形型115基、円頂 方柱型70基、平頂方形型7基、平頂方柱型49基、 笠付方形型5基、笠付方柱型8基、板碑型2基、 位牌型2基、突頂方形型1基であった。この中 で円頂方形型、円頂方柱型、平頂方形型、平頂 方柱型の頭部の形状が単純な墓標を合わせると 62%の割合になり半分以上を占めた。

#### ① 円頂方形型墓標

円頂方形型墓標のうち紀年銘を確認できたものは、115基中46基である。最古の紀年銘を確認できたのは、南西側斜面の旧越後屋墓所に所在した、慶長元 (1596)年の資料である。ただし、これは後世の再建塔である。これ以降、18世紀の紀年銘9基、19世紀の紀年銘31基、20世紀の紀年銘5基を確認できた。

#### ② 円頂方柱型墓標

円頂方柱型墓標のうち紀年銘を確認できたものは、70基中28基であった。最古の紀年銘を確認できたのは、歴代住職の墓地内に所在した慶長18 (1613) 年の資料である。この墓標は、"大久保長安の逆修塚"と呼ばれている墓標である。ただし、これは後世の再建塔である。以降、19

世紀に1基確認できるのみで残りの19基は、20世紀の墓標で、大半は新しい時期のものであることが確認できた。

#### ③ 平頂方形型墓標

平頂方形型墓標について、紀年銘が確認できた墓標は、18世紀の紀年銘が2基、20世紀の紀年銘が1基のみであった。

#### ④ 平頂方柱型墓標

平頂方柱型は、紀年銘が確認できた36基全でが、20世紀の物であることが確認できた。

### ⑤ 笠付方形型墓標

笠付方形型墓標は、5基中、紀年銘の確認できた墓標は3基であった。古い順に文政4 (1821)年、明治33 (1900)年、大正14 (1925)年であった。

#### ⑥ 笠付方柱型墓標

笠付方柱型墓標は、8基中、紀年銘の確認できた墓標は7基であった。内4基は、明治、大正、昭和の紀年銘であった。最も古い紀年銘は、享和3 (1803) 年が確認できた。

#### ⑦ 板碑型墓標

板碑型については、2 基確認できた。1 つは、昭和になってからの造立であった。もう1 つは紀年銘が確認できなかったが、墓標を納めている建物の福光石製の円柱型の柱に文化13(1816)年の銘があった。規模は、高さ89cm、幅50cmであった。

#### ⑧ 位牌型墓標

位牌型墓標については、2基が認められ、改修時古墓と佐渡屋屏式裏の寄せ墓から確認した。紀年銘が確認できた墓標は、改修時古墓の方のみで、享保21 (1736) 年であった。規模は、いずれも高さ65cm 前後と同じ様な規模であった。

#### ⑨ 突頂方形型墓標

突頂方形型墓標は、昭和42 (1967) 年の紀年 銘があり、太平洋戦争中の"満州開拓青年義勇 隊"の墓標であった。 次に墓塔については、一石宝篋印塔18基、組合せ宝篋印塔24基、一石五輪塔11基、組合せ五輪塔3基、宝塔3基の総数59基が確認でき、全体の16%を占めるものであった。

#### ① 一石宝篋印塔

一石宝篋印塔は、18基確認でき、紀年銘が確認できたものは、4基であった。古い順から元和5(1619)年、寛永3(1626)年、寛永5(1628)年、寛政3(1626)年を確認することができた。完形の墓塔は、高さ81cm~107cm、幅24cm~27cmであり、いままで銀山で調査したものと同等の大きさである。

#### ① 組合せ宝篋印塔

組合せ宝篋印塔は、24基が確認できた。うち 完形の墓塔は4基で、残りは部材あるいは部材 が欠失している墓塔であった。殆どのものが改 修時の古墓であり、紀年銘の確認作業が困難 だったため、確認できたのは、僅かに1基のみ であり、寛政11 (1799) 年の紀年銘が確認でき た。規模は、高さ123cm~121cm、幅36cm のものが3基確認できた。改修時古墓内に、基礎から笠までの高さが144cm と116cm と2基の大規模な墓塔が確認できた。

表 1 恵珖寺石造物種別割合表

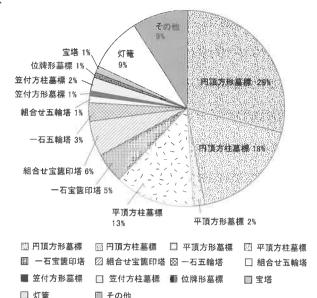
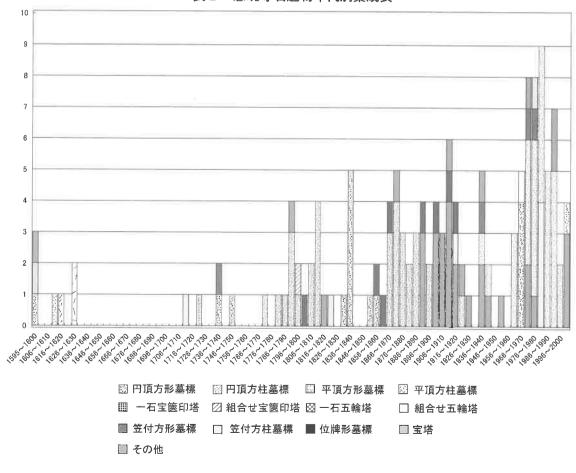


表 2 惠珖寺石造物年代別集成表



#### 12 一石五輪塔

一石五輪塔は、11基確認でき、改修時古墓や他の寄せ墓になっている箇所からの確認であった。紀年銘が確認できたのは、文禄4(1595)年の1基のみであった。規模については、完形の資料は2基あり、サイズは、それぞれ高さ62cm、幅17cm、高さ77cm、幅21cmであった。

#### (13) 組合せ五輪塔

組合せ五輪塔は、3基が確認できたが、いず れも昭和に入ってからの造立であった。

#### (4) 宝塔

宝塔に関しては、3基が確認できた。上から 宝珠、笠、塔身、基礎を組み合わせたつくりで、 確認できた墓塔の笠は、円形であった。完形は 1基のみであったが、紀年銘の確認はできな かった。紀年銘が確認できたのは2基で、いず れも塔身のみの残存であり、慶応元 (1865) 年、 明治44 (1911) 年であった。規模に関しては、完 形の墓塔は、高さ140cm、笠の幅77cm、塔身の 幅40cm であった。

#### 15 その他

その他の形式として以下の5種を確認した。 舟形墓標は2基確認できた。1基は先端のみ残 存で、風化の為、紀年銘の確認はできなかった。 もう1基は、ほぼ完形で全容がつかめる遺存状 況であった。下部に枘の加工が施されていたが、 墓石に伴う台石は近くには確認できなかった。 紀年銘は、慶長5 (1600) 年であった。規模に 関しては、高さ140cm、最大幅33cmの完形品 があった。

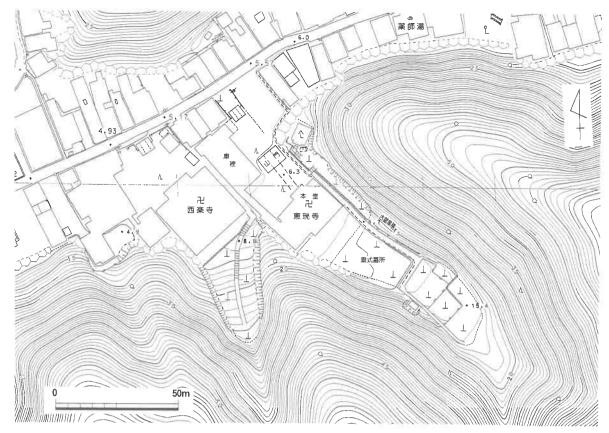
地蔵に関しては、5基確認でき、座像が3基、 立像で光背付が2基確認できた。完形の地蔵は、 座像の1基のみであった。紀年銘は、いずれも 確認できなかった。

淨行菩薩に関しては、蓮座の上で合掌をする 姿の立像である。台石に昭和3 (1928) 年の紀 年銘が確認できた。

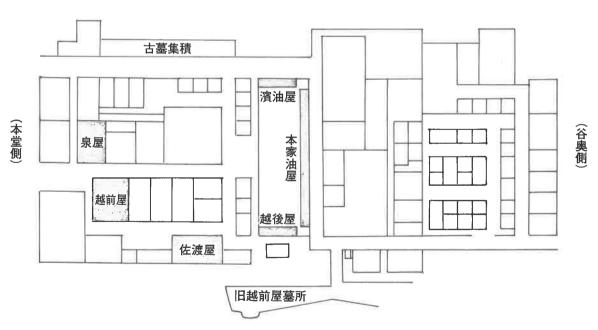
題目塔は、5基確認でき、完形は門の前にある自然石の題目塔のみであった。紀年銘は、なく正面に日蓮宗特有の書体で"南無妙法蓮華経"と彫ってあった。大きさは、高さ167cm、幅66cmであった。

最後に灯籠に関してだが、個体数では36基確認できた。しかし、この数は、あくまでも個体数であり、対になるものが15組、対にならないものが3基、残りの18基が部材のみの確認であった。この内、紀年銘が確認できたのが4基で、もっとも古い紀年銘は寛政4(1792)年であった。この灯籠には、「石工 平七」の銘が確認できた。

(湯川 登)



第2図 調査対象地位置図 (恵珖寺墓地)



第3図 恵珖寺墓地における廟式墓所の配置概略図

## Ⅵ-2 廟式墓所

#### 1. はじめに

本堂奥の谷戸に形成された恵珖寺墓地の中央部に、特徴的な墓所が所在している。江戸時代に廻船業で隆盛を誇った多田家一門の本家油屋・濱油屋・越後屋の歴代の墓石を、前面を開放した細長い建物内に並置する墓所であり、檀家の位牌を納めた位牌堂に類似した構成を採っている。

前面を開放した細長い建物の屋根を除いた基 壇・柱・壁および墓石の石材としては、石見銀 山・温泉津地区の墓石に独占的に使用された福 光石の切石を用いており、内部を収納施設とす るものも認められる。基壇に遺骨を納め、上部 に墓石を並置したものであれば明確な墓所として 把握できるところであるが、恵珖寺墓地内に おいては遺骨を収納せず、墓石のみを並置した 類例も認められる。この場合には詣り墓として 把握すべきものと考えられる。即ち多様を機能 的実践が認められるものの、類似施設を包括し て「廟式墓所」と呼称しておきたい。

代表例としての本家油屋墓所を含む多田一門の墓所は、正面に本家油屋、向かって左側に濱油屋、向かって右側に越後屋の墓所を「コの字」形に配置しており、正面に築地塀を巡らし入り口を設けている。一般的な墓所は特定区画の中に順次歴代の墓石を建立していくのに対して、屋根付の建物内に歴代墓石を並置する様相は、墓所に明示された階層性を顕示するものとして注目される存在である。

恵珖寺墓地における多田一門の墓所は、本家と並存する2分家に特徴的な廟式墓所以外に、本家越前屋は独立した廟式墓地であり、一門他家は一般的な墓所を形成している。上油屋・堺屋・武蔵屋・豊後屋は一般的な墓地を形成しており、占有面積においては堺屋・豊後屋は本家越前屋を上回っている。墓地の規模と占有面積において一門内の序列を窺うことができよう。

本家油屋を含む廟式墓所内部の規模は幅 8.6m、奥行き4.2mであり、全面に福光石の切 石を敷いている。正面入り口幅は1.5mであり 内部の左右に石燈籠を配している。幅29尺、奥 行き14尺、敷地11坪を誇る特徴的な墓所である。

恵珖寺墓地の中には小規模ではあるが同形式の墓所として、佐渡屋・泉屋の2家の墓所を確認できる。さらに松屋墓所は、前面を開放した基壇上に墓石を並置する廟式墓所とは異なるものの屋根を架し、これを支えるのに同様の石製円柱を用いる点において類似しており、類似施設として留意されるところである。

これらは、いずれも江戸時代において日蓮 宗・恵珖寺を支えた有力な檀越の墓所と考えら れるところである。

## 2. 墓所の構造

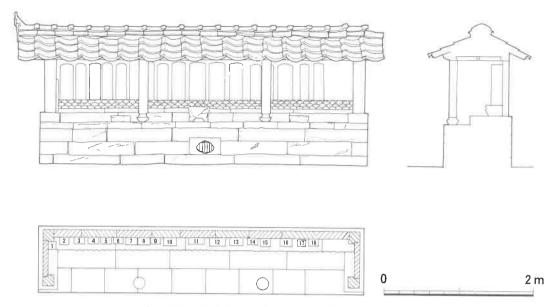
#### (1)・【濱油屋墓所】

多田家一門墓所のうち向かって左側に位置する濱油屋の墓所は、奥行き半間(3尺・90cm)、幅14尺(420cm)の規模であり、4段の切石を積み上げて高さ2尺(60cm)の基壇としている。

正面を除く3面に高さ3尺(85cm)の壁を 巡らし、木材を用いた高さ2尺(50cm)の瓦 葺の切妻屋根を架している。壁は厚さ3寸 (9cm)の板状の石材を用いており、四隅に5 寸(15cm)角の石材の柱を建てた間に組み込 んでいる。前面を開放した基壇上の奥の3分の 2は、更に切石を1段積み上げて墓石を乗せる 段を形成している。基壇前面には礎石の上に径 4寸(12cm)の石製の円柱を2本配置して屋 根を支えている。

墓石は、前面に3段の蓮弁を表した台石の上に並置されている。中央部には「南無妙法蓮華経」と表した題目塔を配置しており、これを含めて17基を数える。さらに左隅には木製の墓標1基が所在しており、合計は(1)~(18)の18基である。全体の配置は他例と比較すると墓石間に間隙を有しており、再配置した結果と考えられる。

基壇正面の2石目の中央部には、高さ22cm、



第4図 廟式墓所(濱油屋)実測図(1:40)

幅40cmの取り外しできる蓋石が組み込まれ内部は納骨施設となっており、多数の墓石が収納されていた。(73)・(74) は内部から確認された資料である。

正面左側の柱には「多田友三郎再建之」、右側の柱には「明治十年丁丑七月濱油屋墓所」と認められ、現在の墓所は明治10年に再建されたものと確認することができる。

#### (2) 【本家油屋墓所】

本家油屋墓所も、基本的には同様の構造を採っている。奥行き半間(3尺・90cm)、幅26尺(770cm)の規模であり、濱油屋と同じく4段の切石を積み上げて高さ2尺(60cm)の基壇としている。前面を開放する建物の柱・壁は石材を以ってする点も同様であり、切り妻形式の屋根も同じである。開放した前面には4本の石製の円柱を配して屋根を支えている。柱間は中央がやや広く5.7尺(170cm)にとり、両脇は4.7尺(140cm)、左右の角柱との間隔も4.7尺(140cm)としている。

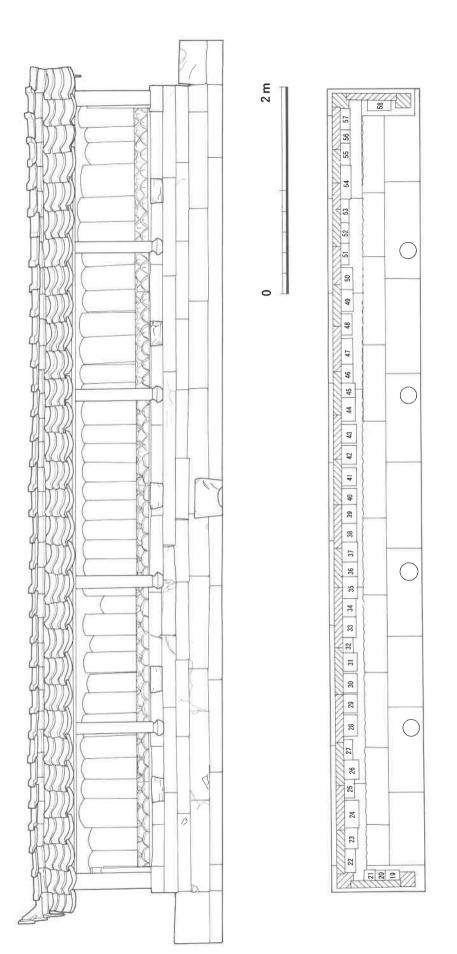
基壇上の奥に1段の切石を置いて高くし、更にこの上に、前面に蓮弁を彫刻した台石を置き 墓石を並置する点は同様であるが、台石前面の 蓮華は2段の表現とする点において濱油屋とは 異なっている。 台石上に並置された墓石は、両脇に配置されたものも含めて(19)~(58) の合計40基を数える。このうち(20)・(21) の2基は木製の墓標、中央部に配置された(40)は題目塔であり、これら3基を除く墓石は47基である。

正面右側の石柱には「慶應三年丁卯五月本家油屋」、左側の石柱には「多田亀治源孝久」と表されており、慶應3(1867)年に再建されたことが分かる。

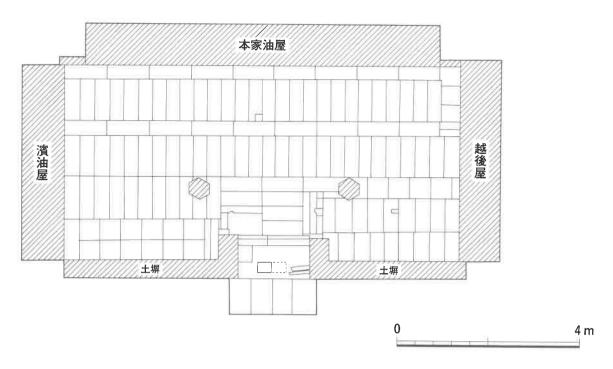
#### (3)【越後屋墓所】

多田一門墓所内のうち、向かって右側に位置する越後屋墓所は、正面の本家油屋墓所を介して対峙する濱油屋墓所とほぼ同規模である。奥行き半間(3尺・90cm)は等しく、幅が14.5尺(435cm)と少し広くなっている。基壇の高さは2尺(60cm)と等しいものの、切石は薄手の石材を用いて5段としている。壁・屋根の構造は等しく、前面を開放して2本の円柱を等間隔に配している。前面に3段の蓮華を彫刻した台石は5石を連接しており、角の台石は切組んで角柱と組み合わさっている。

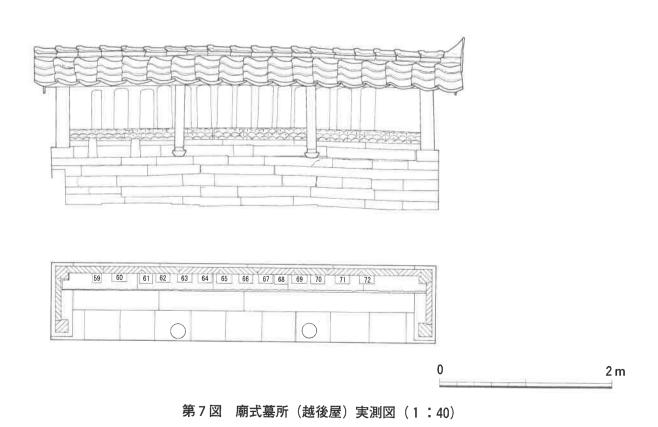
台石上に並置された墓石は、余裕を持って (59)  $\sim$  (72) の14基を数えるが、左隅の 1 基(59) は木製の墓標であり、隣接する (60) の墓石と 同じ内容を表している。再配置した結果と判断



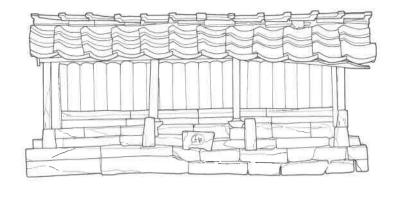
第5図 廟式墓所(本家油屋)実測図(1:40)

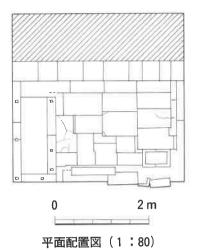


第6図 廟式墓所(多田家本家油屋・濱油屋・越後屋)平面配置図(1:80)



- 21 -





- 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 -



第8図 廟式墓所(本家越前屋)実測図(1:40)

されるところである。

前面右側の石柱には「明治十一年戊寅三月越後屋墓所」、左側の石柱には「多田芳太郎再建之」と表されており、明治11(1878)年に再建された点を確認できる。

以上に概略を記した3家からなる多田一門の墓所は、計画的に配置されている点は明白である。同規格の墓石が並置されている状況は、ある時点で先祖の墓石を含めて造作されたものと思われるものの、創建年代は明確ではない。しかしながら、規模の差異を除くと類似する構造の3家の墓所のうち、墓石を載せる台石前面の蓮華の彫刻において、本家油屋が2段であるのに対して、濱油屋と越後屋墓所では3段とする明確な違いを確認できる。

この点は両脇 2 分家の墓所の造営が本家に遅れる点を暗示するところである。

再建年代は本家油屋が慶應3 (1867) 年、濱油屋が明治10 (1877) 年と10年遅れ、越後屋は明治11 (1878) 年と最後となる。再建の年代も一門内における序列を反映するようである。

#### (4)・【本家越前屋墓所】

本家越前屋の墓所は、多田一門有力3家の墓所から離れて本堂に近い位置に所在している。幅2間(365cm)、奥行き2間(360cm)の敷地の奥側に、奥行き半間(3尺・90cm)、基壇幅2間の墓所を建築している。さらに規模は異なるものの、前面には切り石を敷き詰める点においては本家油家墓所に類似している。しかし現在祭祀も絶えて荒廃しており、本来石燈籠を配した前面の部分の玉垣は欠落し、墓所の基壇も一部崩落している。

墓所の前面には、2段の基礎の上に位置する 組合せ五輪塔が半壊して遺存しており、墓所基 壇の前は幅2尺で1段高く造作されている。墓 所の基壇は前面から見ると2段の切石を積み上 げて高さ1尺(30cm)に構築しているが、敷 地全体では前面の敷石と墓所前面の1段を加え て4段構成となる。

墓所は前面を開放した横長の切妻屋根である 点は他例と同じであるが、現状では隅に配され た柱および壁は木製板材で構成される点で他例 とは異なっている。また側面の両側に幅4寸 (12cm) の石柱が基壇前端に配置されている点においても異なっている。即ち側壁の幅が広く設置されている。

開放された基壇前面は、墓石を載せる台石を含め4段に構成されており、本家油家墓所の2段と異なる。壁の高さは全体で3尺(90cm)であるが、台石の上の木製部分は70cmである。基壇前面の1段目には円形の礎石の上に、径3寸(9cm)の2本の円柱を建てて屋根を支えている。間隔は4尺・3尺・4尺と中央間を狭く配置している。墓石を載せる2段の台石の前面には連弁の彫刻は施してはおらず、家格を表しているものとも考えられる。

台石上には隙間なく墓石が並置されており、 22基を数える。中央には題目塔を配しており、 墓所内には木製の簡便な位牌2点も安置されて いた。

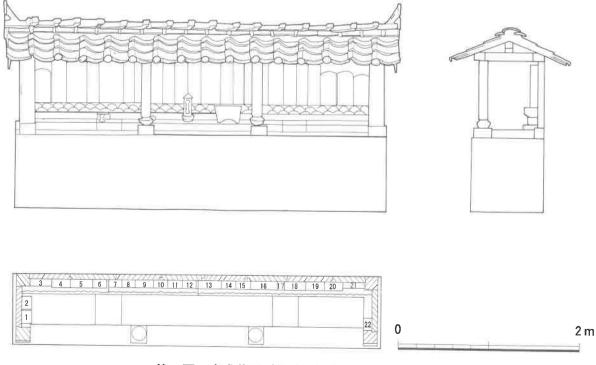
前面の円柱には、左側に「文化十二乙亥仲秋」、右側には「本家越前屋」と表されており、文化12 (1815) 年の創建と確認できる。本堂奥の谷戸に形成された恵珖寺墓地を限る西側の尾根斜面中腹を箱形の龕状に掘削して、内部に6

基の宝篋印塔が安置されている。右側の3基が 一石宝篋印塔、左側の3基が組合せ宝篋印塔で ある。いずれも表面の風化が著しく、銘文を確 認することはできない。この地点は「旧越前屋 墓地」と伝えられており、廟式墓所を創建する 以前の状態を留めているものと考えることがで きよう。

#### (5)・【佐渡屋墓所】

佐渡屋墓所は、多田一門墓所の前面右側に離れて所在している。本来切石積みであったものと思われる基壇はコンクリートで補修されており、高さは80cmを測る。現状は基壇上面いっぱいに、隅に角柱を配して両壁および奥壁を立ち上げている。

奥行き2.7尺(80cm)、幅13尺(395cm)、壁の高さ3尺(90cm)の規模であり、基壇上は3段構成として、この最前の段上のコンクリート角台の上に円形の礎石を置き、径4寸(12cm)の石柱2本を建てて屋根を支えている。柱間は両側の柱を除き4尺間隔とする。壁の高さは2.5尺(75cm)とやや低いが、屋根は切妻である



第9図 廟式墓所(佐渡屋)実測図(1:40)

点において等しい。墓石を載せる台石の前面に は2段の蓮華が表されており、この点は本家油 屋墓所に類する。基壇上面にはコンクリート製 の蓋を配しており、基壇内部を収納施設として

並置された墓石は22基を数え、中央に題目塔 を配して中央近くに年代的に遡る墓石を配置す る点は他家に等しい。

#### (6) 【泉屋墓所】

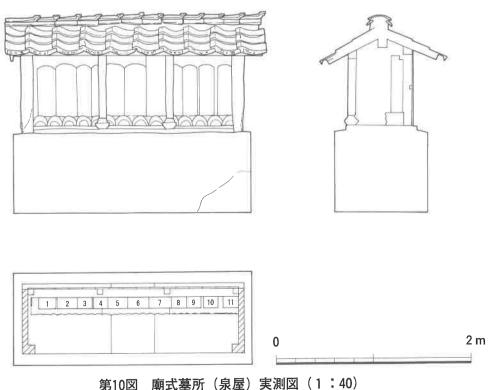
泉屋の墓所は、墓地内の本堂に近い場所に位 置している。高さ80cmの基壇はコンクリート で補強されており、基盤上面いっぱいに奥行き 2.5尺 (75cm)、幅7.7尺 (230cm) の前面を開 放した墓所を構築している。廟式と呼称した墓 所の中では最も小規模な構造である。両側壁は 厚さ2寸(6cm)の1枚の石製板材をもって 構成されており、前面を幅4寸(12cm)に拡 大して柱を兼ねている。

奥壁は木製板材で構成されており、壁の高さ は2.5尺 (75cm) であり、2本の径3寸 (9cm) の円柱で切妻式の屋根を支えている。柱間はほ ほ2.5尺 (75cm) 間隔である。基壇上面には幅 45cm のコンクリート製の蓋が配されており、内 部を収納施設としていることが分かる。墓石を 載せる台石の前面には1段の大形の蓮弁が彫刻 されており、他家例とは異なっている。両端の 柱部分には、右側に「大森泉屋」、左側に「再 興文化十二乙亥年十月造立之川北通繁」と表さ れており、越前屋墓所と同じく文化12(1815) 年に再建されたことを確認できる。

並置された墓石は11基を数える。他例とは異 なって中央に題目塔を配してはいないが、この 点は墓所の規模に関連するものと思われる。ま た塗りの剥げた簡素な木製位牌1基も墓所内に 安置されていた。

#### (7)・【松屋墓所】

松屋墓所は、多田一門の本家越前屋墓所の西 側に位置している。墓地内において屋根を架し た墓所は上記した6家の廟式墓所と、この松屋 墓所に限られる。切石を3段積んだ基礎の上に 前面を開放した横長平面の墓所を、木材を用い て切妻屋根形式で覆っている。



内部中央には切石を配して台石とし、この上に礎石を伴う径4寸(12cm)、高さ4尺(120cm)の石製の円柱2本を建て上部に木製の斗栱を組んで棟を支えている。柱間は4尺(120cm)であり、この間には基礎を含めた総高4尺(113cm)の石製大形位牌を安置している。この石製大形位牌の両側には通常規模の墓石が配置されている。

この松屋墓所の構造は他家墓所とは大きく異なっているものの、石製の円柱を配する点においては共通している。特異な構造を呈する位牌堂として認識できよう。2本の石柱には「再建主森山富兵衛貞由」、「文化十二丙子八月日松屋」と記されており、文化12(1815)年の建立と確認できる。

## 3. 墓石の様相

恵珖寺墓地の特徴的な墓所に並置されている 墓石は、いずれも石見銀山墓石分類では「円頂 方形型式」に類別されるものである。各墓所に 並置されている墓石は、一見して同規模・同型 式のものが主体を占めるおり、特徴的な墓所を 創設した時点における一括造作を想定させる。

#### (1)・【本家油屋墓所】

多田一門墓所における本家油屋および分家の 濱油屋・越後屋の3家の墓所は、その配置から 計画的に創設されたものと想定できる。本家油 屋の墓所に並置されている墓石は、木製の墓標 2基を除くと38基であり、その中央に題目塔を 配置している。

題目塔以外の墓石では、左端に配置された (19) は記された「一如」の頭書と「釋○○」の 戒名より浄土真宗、右端に配置された (58) は「○誉○○」の戒名より浄土宗に属する墓石と 判断され、多田本家油屋と有縁の諸霊を合わせ 祀ったものと判断される。

この2基以外の36基が日蓮宗恵珖寺に伴う墓石と判断される。墓石の規格には若干の変容を確認できるところであるが、墓碑銘の記載方式は平滑な表面の上部に「妙法」の頭書を記し、下位に蓮座を表す墓石は少ない。また墓石表面

を平滑とするのみでなく、周囲に枠を設けて中を1段彫り窪める墓石も両脇に合計8基配置されている。

題目塔は先祖諸霊を合祀するに当たって設置されたものであり、蓮座上の中央に大きく髭題目を表している。墓所を表徴するものとして、歴代墓石との規模比較が問題となる。

36基の墓石の規模を集成すると、幅10.5~31cm、高さ38~57cm、厚さ9~15.5cm の変容を確認することができる。題目塔(40)の規模は、幅6寸(18cm)、高さ1尺8寸(53.5cm)、厚さ5寸(15.5cm)であり、厚さが幅の83%を占める厚手の仕様である。

この題目塔と同規格(幅18~19.5cm、高さ 53~55cm、厚さ14.5~15.5cm)の墓石は、題目塔の両側に左右交互を基本として配置された元祖・初代以降の歴代の墓石が確認できる。題目塔 (40) の向かって左側に配された(35) ~(39) の5基、右側の(41) ~(43) · (45) に配された 4基の合計 9基である。更に離れて左側に位置する (26) も同規模であり、右側の (44) も幅が23cmと大きく異なるものの高さと厚さは同規模として認識できる。幅が基本を上回る点は、(44) 以外の同規模墓石には  $1\cdot 2\cdot 3$  名の戒名を刻んでいるのに対して、(44) には唯一 4名の戒名を刻むことに起因したものと思われる。

即ち題目塔を中心として配置された墓石のうち、同規模と考えられる墓石が11基確認でき、これは墓石に確認できる当主の没年を勘案すると、元祖(41)、初代(39)以降11代までの歴代世代の墓石と確認することができる。

歴代当主以外の子供の墓石は、題目塔を中心に中央に配置された歴代墓石の両側に置かれている。墓石の幅は複数の霊を合祀するために歴代世代墓を上回る墓石が多いが、多くは高さにおいて劣っており中に上回るものも認められるが、厚さにおいて明確な差異を表している。10~12cmの厚さに造作したものが多く、同規格の墓石は認められない。

### (2)【濱油屋墓所】

濱油屋の墓所に並置された墓石は、木製の墓標1基を除くと17基である。17基の墓石の規模を集成すると、幅11~21.5cm、高さ48~52.5cm、厚さ8.5~12cmの変容を確認できる。これは本家油屋の墓石の変容幅より狭く、総体として本家油屋より小型に造作されたものと確認できる。並置された墓石の1基の裏面には、墨書で「石工福光村/山中平三郎長男嘉市良」と認めることができ、石材産出の地元である福光村の石工の請負仕事を確認することができる。

また墓碑銘の記載方式は、上部に「妙法」、 戒名の下位に蓮座とほぼ統一されており、蓮座 を普遍化する点において本家油屋とは明確に異 なっている。17基の墓石のうち、同規格と認識 できる墓石は2種類確認できる。①類は 幅 $15.5\sim16.5$ cm、高さ $52\sim52.5$ cm、厚さ $9.5\sim1$ cm の規格の3基と、幅を1寸増した $21\sim1$ 21.5cm の2基を加えた5基である。②類は幅  $13.5\sim14$ cm、高さ $48\sim49$ cm、厚さ $8.5\sim9$ cm の規格の4基である。

これらは、①類が(10)・(11)・(12)・(7)・(8)であり、本家8代・3代・3代実父母・5代と明記された、歴代当主を含む世代墓として造立されている。このうち(10)は本家8代と表されており、本家油屋の(44)に合祀された当主と3人の室のうち、(11)の当主の実父母の戒名を明記している。(44)の規模は幅23cm、高さ53.5cm、厚さ15cmの規模であり、本家の墓石に認められた同規格の1つとして、(10)とは明確に規模の差異を顕現している。また(12)の墓石内容は、本家11代の(35)としても確認できるところであり、(44)と(10)と同様に、本家と分家の墓石に表出された格差を確認できる。

即ち、濱油屋①類の墓石は、本家墓石とは明確な差異を保って歴代当主の墓石として誂えられたものと考えることができる。一方②類の墓石は子供の墓石と、2代(9)の墓石として確認できるところであり、同時に意識的に格差をもって造作されたものと考えられる。

以上を総括すれば、濱油屋の墓所の創建年代

は本家同様に不明であるものの、規格化された 墓石の最新の墓石である5代当主(8)の没年 である弘化2(1845)頃を一応の目安として考 えることもできよう。しかしながら(11)の墓 石は、(12)に祀られた(11)の娘夫婦によっ て文化9(1812)年に造立されたことが墓碑銘 により確認できるところであり、この文化9年 時点に墓所を整備し、以後の墓石は家に伝統的 な2区分された墓石規格に従ってものと考える こともできる。

また、谷戸に形成された恵珖寺墓地の西側尾根の裾部には、無縁墓石が集積されているが、中の1基に幅の狭い円頂方形型式の墓石に濱油屋墓所の墓石に認められる戒名と同一のものを確認できた。(3)の世代墓のうち、昭和20年に没した当主の個人墓石であり、連れ合いの一方が先没した時に個人墓を造立し、その後に夫婦世代墓を造立した時点で無縁としたものと思われる。

#### (3)【越後屋墓所】

越後屋墓所に並置された墓石は、左端に配された木製の墓標1基を除くと13基である。この墓所に配された墓石も、濱油屋墓所における墓石と同様に本家油屋墓所の墓石とは明確な格差をもって造作されている。

墓碑銘の記載方式においては、上部に「妙法」、下部に蓮座を表す点において濱油屋と同様である。墓石の規模は13基中の10基が同規格と認識されるところであり、幅16.5~17cm、高さ49.5~51cm、厚さ9~11cmのうちにある。また墓石はすべて円頂方形型式で表面を平滑にする点においても等しい。この規格は、濱油屋①類とは高さにおいて劣っており、分家間の格差を顕示するものと考えられる。

同規格と考えられる10基の墓石は、当主没年から想定される歴代のすべての墓石として認識できるものの、紀年銘を欠く墓石が多く一括造作の年次は不明とせざるを得ない。

以上多田一門3家墓所における墓石の様相からは、ほぼ天保・弘化(1830)年代に歴代世代墓を一括して誂えて墓所を創建したものと考え

ることができよう。

#### (4)・【本家越前屋墓所】

本家越前屋墓所には22基の墓石が並置されており、中央に蓮座を伴う題目塔が配されている。この題目塔を中心として左右に歴代の世代墓を配置する点は本家油屋、佐渡屋に等しく、独立した墓所の特徴として認識される。また歴代の子供の墓石を左右両側に配置する点も同様である。

他家の墓石に比較して幅の狭い点を特徴とする円頂方形墓石の下部には、題目塔を除きすべて連座を表している。中央に配された題目塔を中心とする墓石の上部には梅鉢の家紋を表しており、両側の墓石では上部に「妙法」の頭書を表している。

この墓石における表記法の差異は、左右両側の4基ずつの妙法を表す8基の墓石はすべて子供の墓石であり、中央に配置された歴代世代墓とは明確に区分されている。

この本家越前屋墓所に並置された墓石は、他家墓所の墓石に比較して規格性を顕著に確認することができる。幅13.5cm、高さ51.5cm、厚さ9.5cmを基本として若干の変容を示すのみである。

幅は $13.5\sim14$ cm、高さは $51\sim51.5$ cm、厚さは $8.5\sim9.5$ cm の違いであり、基本形を呈するのは、 $(2)\cdot(3)\cdot(4)\cdot(6)\cdot(9)\cdot(12)\cdot(14)\cdot(20)\cdot(21)$  の9基、厚さのみが9 cm とやや薄くなるのは、 $(7)\cdot(8)\cdot(10)\cdot(11)\cdot(13)\cdot(16)\cdot(22)$ の7基である。また幅を14cmとするのは $(15)\cdot(17)\cdot(18)\cdot(19)$ の4基であり、この他では(1)が高さ51cm の厚さ8.5cm、(5)が唯一厚さ9.3cm である。

想定される太祖以後9代の世代墓は、(9)と(14)を除くとすべて厚さ9cmである。あるいは歴代の世代墓石に限っての造作とも考えられるものの、(8)と(22)にも確認でき、他家墓石のような限定性は認められない。

墓所の石柱には「文化十二乙亥仲秋」と墓所 整備の紀年銘が確認できる。この時点で歴代の 墓石を新造したものと考えると、以後の年代を 示す墓石は伝統に則って必要に応じて誂えられたものと判断される。

以上に墓石の概要を記した多田一門 4 家の墓石は、その大きさにおいて明確な差異を確認することができる。4 家の歴代世代墓を比較すると、①・本家油屋では幅 $18\sim19.5$ cm、高さ $53\sim5$ 5cm、厚さ $14.5\sim15.5$ cm、②・濱油屋では幅 $15.5\sim16.5$ cm、高さ $52\sim52.5$ cm、厚さ $9.5\sim1$ 1cm、③・越後屋では幅 $16.5\sim1$ 7cm、高さ $49.5\sim5$ 1cm、厚さ $9\sim1$ 1cm、④・本家越前屋では幅13.5cm、高さ51.5cm、厚さ $9\sim9.5$ cmである。

この差異は本家以下の家格を表しているようであり、①・本家油屋は幅・高さ以上に厚さが勝っており、②・濱油屋と③・越後屋は幅と厚さは拮抗するものの、高さにおいて峻別されている。④・本家越前屋は③・越後屋と高さはほぼ等しいものの、幅と厚さで区分されている。

#### (5)・【佐渡屋墓所】

佐渡屋墓所には22基の墓石が並置されており、中央に蓮座を伴う題目塔が配されている。 題目塔の裏面には墨書にて「文化十三年丙子二 月上旬」、「本家佐渡屋惣右衛門五代目」と明記 されており、歴代世代墓を新造して墓所を整備 した年代が判明する。

円頂方形の表面を平滑に仕上げた墓石は、下位に蓮座を表すものの、上部に「妙法」の頭書を表すものは少ない。題目塔に集約され、「南無妙法蓮華経」の簡略形としての「妙法」を個別の墓石には表さない特性を明示している。「妙法」を記した墓石は両脇に配置されており、多くは子供の墓石として造作されている。

題目塔の規模は、幅14.5cm、高さ54.5cm、厚さ10cmである。ここに確認できる高さ54.5cm、厚さ10cmに近似し、幅のみが異なる墓石は13基を数え、歴代当主を含むすべての世代墓が含まれる。幅は5寸(15cm)、7寸(21cm)、8.5寸(26cm)、1尺(31cm)の変容を示しており、5寸を基本とし合祀が3人で7寸、4人で8.5寸、5人で1尺の内容を確認できる。

即ち、佐渡屋墓所における墓石の様相は、題

目塔に認められた文化13 (1816) 年は5代当主 の没年に一致しており、5代当主の墓石造立を 機に特徴的な廟式墓所を創設したものと考える ことができよう。

佐渡屋墓所においては個人墓も(18)と(20)が確認でき、ともに夫婦の世代墓にも戒名を確認できる。これは即ち、先没した連れ合いの墓を個人墓として造立した後に、新たに夫婦世代墓を造立した結果であり、他の銀山地区の墓地においても確認されるところである。ともに題目塔に明示される規格に外れた大きさであり、墓所整備以前の形状を窺うことができる資料と考えられる。

#### (6) · 【泉屋墓所】

泉屋墓所には11基の墓石が並置されているが、他と異なって埋葬地すなわち埋め墓を別に設けたことが墓碑銘に明記されており、詣り墓として設置されたことが明確である。この故に他家の墓所と異なって歴代の子供の墓石は配されてはいない。

円頂方形型式の墓石の表面は平滑に仕上げられており、上部には本家歴代の世代墓には歴代数を表し、分家では「蔦」の家紋を表すことによって差異を顕現している。墓石には規格性が顕著であり、高さは初代の(5)が1尺7寸(51cm)である以外は、1尺5寸(44cm)にほば統一されている。幅は(1)を除いて、2人合祀で5寸、3人合祀で7寸となっている。

また墓石の厚さでは、本家歴代墓が4寸 (12cm)であるのに対して、分家では3.3寸 (10cm)の区分が明確である。この厚さの点においても(1)は異なっている。(1)は3人合祀にもかかわらず幅5寸(15.5cm)と他の2人合祀の規模であり、厚さは11cmで上記した厚さの中間の値となっている。(1)は本家6代の(10)と同一の内容であり、(10)に先行して造立されたものと判断される。墓石表面の風化の度合いも他例よりは著しく、上部は劣化して歴代数も明確ではない。

墓所の石柱には「再興文化十二乙亥年十月造立之川北通繁」と表されており、6代「通繁」

代に再興されたことが確認できる。6代の世代 墓が新旧の2基並置されている事実は、6代の 没年(天保15年)以後のある時点、没年が明記 されていない7代目の世代墓(11)が同規格で ある点を考慮すると、1850~60年代すなわち幕 末に墓石を新誂した可能性が高いものと考えら れよう。

#### (7) ·【松屋墓所】

松屋墓所は他家墓所と異なり、位牌堂と呼び得るものである。廟式墓所に特徴的な円形礎石を伴う円柱2本を配置した間に大形石製位牌を配置して祀っている。位牌は幅2尺3寸(67cm)、高さ8寸(23cm)の内部に格狭間状の刳り込みを有する基台と、上端を円頂に仕上げた幅1尺7寸(50cm)、高さ3尺(90cm)の本体から構成されている。

位牌には5代27人が合祀されており、石柱に表された文化12(1815)年に、位牌中央の題目の下位に記された「觀性院妙覺日量、觀利院宗覺日壽」の供養を直接的な契機として造立されたものと考えられる。

## 4. 墓碑銘から想定される各家の系譜

#### (1) · 【本家油屋】

正面の墓所に並置された本家油屋の墓標は、 $(19)\sim(58)$ の総数40基を数え、このうちの(20)と (21) は昭和10年代の没年を記した木製墓標、中央に配された (40) は題目塔であり、これらを除く墓石は37基である。

並置された37基の墓石は、基本的には墓石上部に「妙法」の頭書を配した夫婦の戒名を並記する世代墓であり、多数確認できた子供の墓石は合葬墓の形式を採っている。子供の墓石を除き、本家歴代の戒名は日蓮宗に特有な「院日号」を有しており、「信士・信女」、「居士・大姉」の下位書の区別を認めることができる。

また多田一門の墓石にあっては、続柄を表したものは極めて少ない。従って没年をもとに想定される系譜関係は必ずしも親子関係を表すものではない。以下に歴代当主と想定される戒名を表した墓石を年代順に記述する。

中央に「南無妙法蓮華経」と鐫刻した題目塔 (40) を配置しており、裏には墨書で「温泉津 油屋□□」の墨書を認めることができた。基本 的には、この題目塔を中心として年代の遡る墓 石が左右交互に配置されている。

多田家元祖の墓石は題目塔の向かって右側に配置されており、「妙法」の頭書の下位に元祖 1人の9字戒名を表す。戒名の左右に没年月日を並記しており、慶長11 (1606) 年の紀年銘が認められる。初代の墓石は題目塔の向かって左側に配置されており、夫婦の世代墓 (39) である。夫婦ともに7字戒名であり、当主の慶安4 (1651) 年の没年を確認できる。この本家初代は、この多田一門墓所から離れて同形式の墓地を形成している本家越前屋の太祖 (11) とされており、本家越前屋は (39) の子供の世代が分家したものと判明する。

次いで古い紀年銘が認められる墓石は承応元 (1652)年の(42)の世代墓であり、夫婦ともに7字戒名である。4代は墓石に明記されている(38)の墓石であり、寛文12(1672)年の当主没年が確認できる世代墓である。夫婦ともに9字戒名であり、以後歴代墓は基本的に9字戒名である。

(43) は当主没年が元禄8 (1695) 年の世代墓である。当主の左右に2名の信女を配しており、先妻と後妻と思われ、両者の没年には43年の隔たりがある。(48) は「5代目吉左衛門子」と記した3名の子供、(49) には「吉左エ門子」と記した2名の子供の戒名が認められる。これら5名の子供の没年は、正保3 (1649) 年から天和2 (1682) 年に及ぶものであり、(43) の子供と考えることができ(43) を5代目と考えることができよう。

しかし同じく「吉左エ門子」とする (51) の 2 名の子供の没年は宝永 7 · 8 (1710 · 11) 年 であり、(43) の没年以後であり問題を残す。

(26) は宝永6 (1709) 年の当主の没年を確認でき、(37) は正徳2 (1712) 年の没年である。(43) を5代目と考えると、(37) は7代目となる。(52)・(53) に認められる7人の子供が「7代多田宗兵エ子」と表記されており、没

年は享保7 (1722) 年から延享5 (1748) 年に 及んでいる。しかしいずれも (37) の没年以降 となり、表記に混乱が認められる。世代的には (36) の子供となろう。

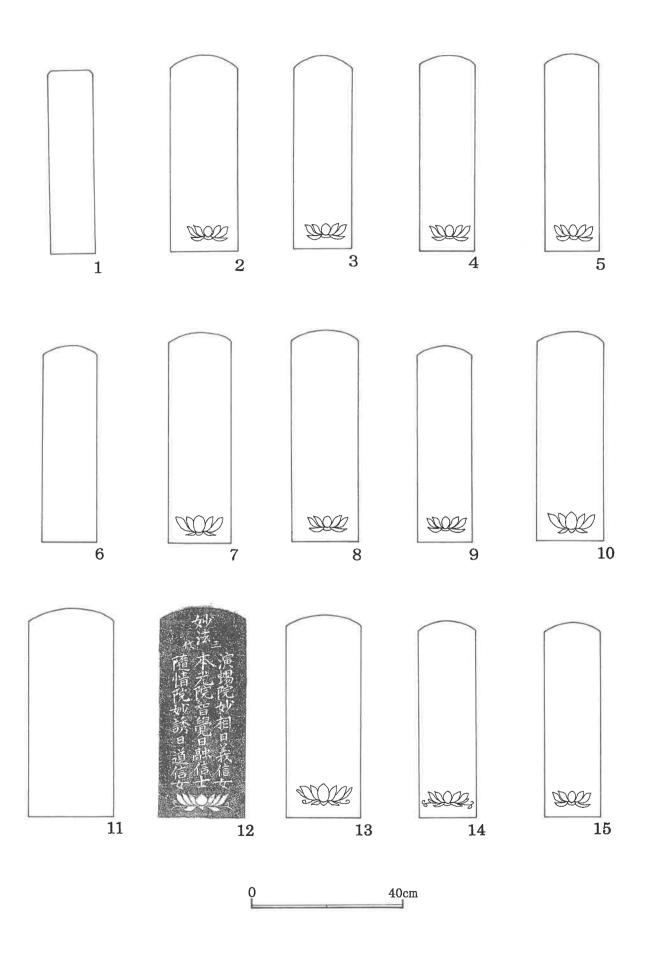
(29) の世代墓は享保17 (1732) 年の没年であり、年代的には (37) の次に位置する。しかし俗名に地名を冠しており、墓石の配置も中心を外れているため歴代当主とならなかったものと判断される。(27) は (29) の子供2名の墓石である。

(44) は、当主の没年が寛延3 (1750) 年と確認できる世代墓であり、信女2名と大姉1名が並記されている。女性の没年は1727・1733・1766年であり、3人を娶ったことが分かる。これは濱油屋の墓石(10) に、本家8代として当主と1766年没の夫婦世代墓石が確認され、(44)が本家8代であったものと確認できる。(57)は8代目の子供2名の墓石である。

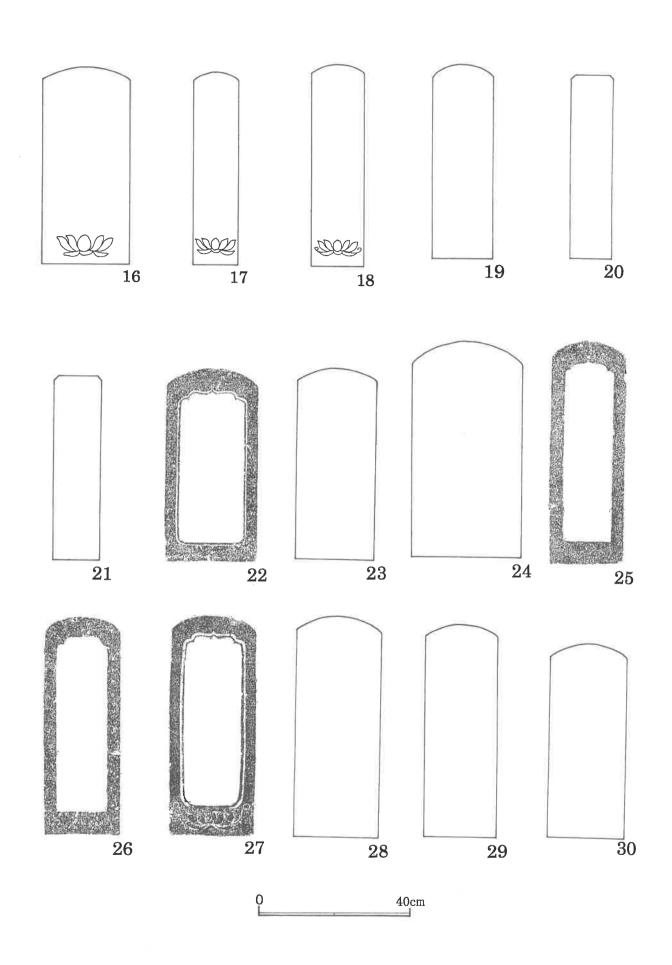
(36) は寛政7 (1795) 年の当主没年を確認できる世代墓であり、11字戒名を有する当主の両側に先妻と後妻と考えられる信女2名を配している。(45) は文政元 (1818) 年の当主没年であり、当主57歳、室49歳と行年の知れる数少ない墓石である。(35) は当主と信女2名を並記している。信女2名は文化14 (1817) 年と天保2 (1831) 年の没年であり先妻と後妻と確認できるが、当主の没年は記されていない。(35)と同表記の墓石は、濱油屋の(12)として存在しており、当主没年は天保10 (1839) 年と確認できる。

(50) は夫婦と3名の子供の戒名を並記した世代墓であり、この形式の記載は唯一例である。当主は嘉永元(1864)年の没年であり、9字戒名であるが、室は7字戒名である。(33)は当主没年が明治22(1889)年と確認できる世代墓である。当主の多田亀治源孝久は、慶應3(1867)年に墓所を再建しており、84歳の長寿を全うしている。

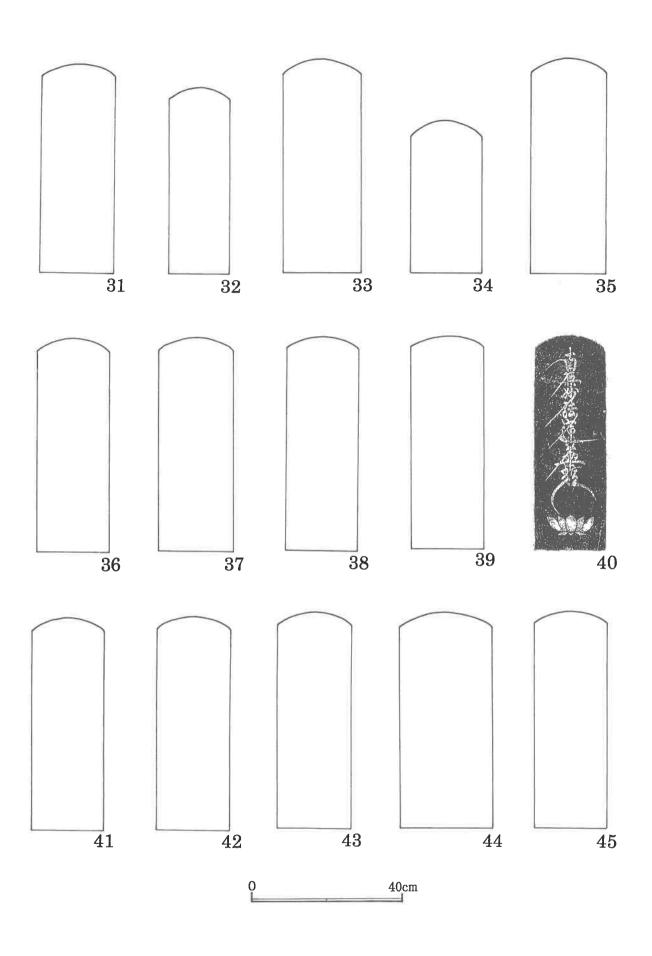
(31) は当主没年が明治38 (1905) 年と確認できる居士・大姉を記した世代墓であり、昭和10年の没年を記した信女の戒名は子供と考えられる。また(32)は(31)の子供の墓石である。



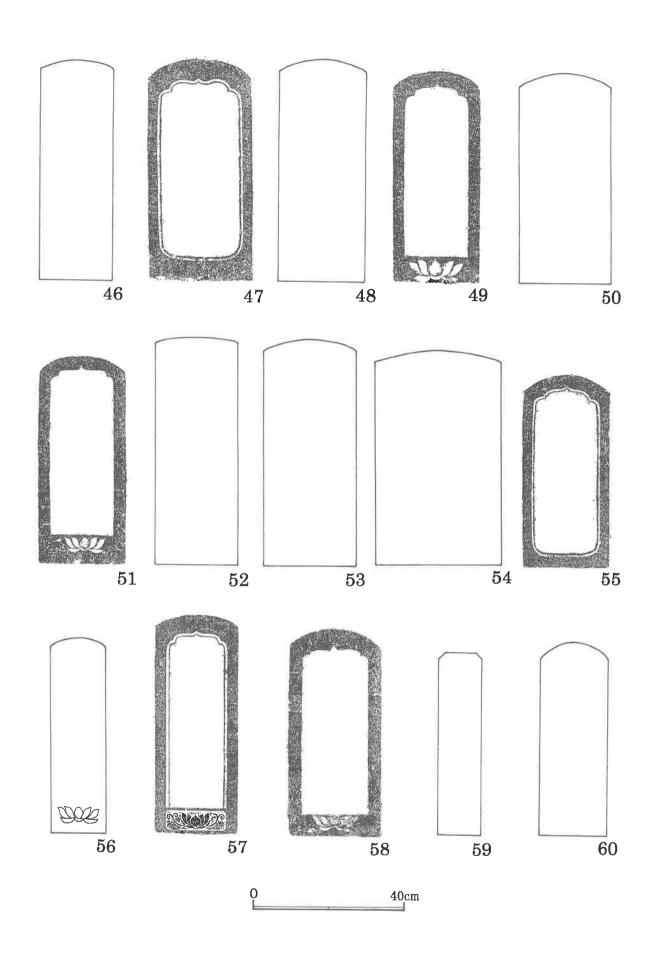
第11図 1~15 (濱油屋墓石)



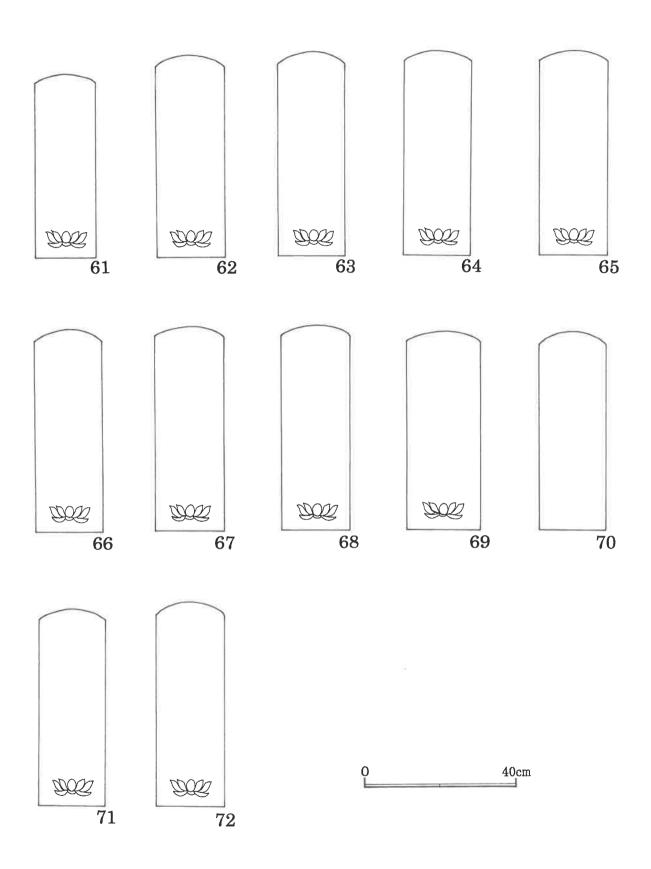
第12図 16~18 (濱油屋墓石)、19~30 (本家油屋墓石)



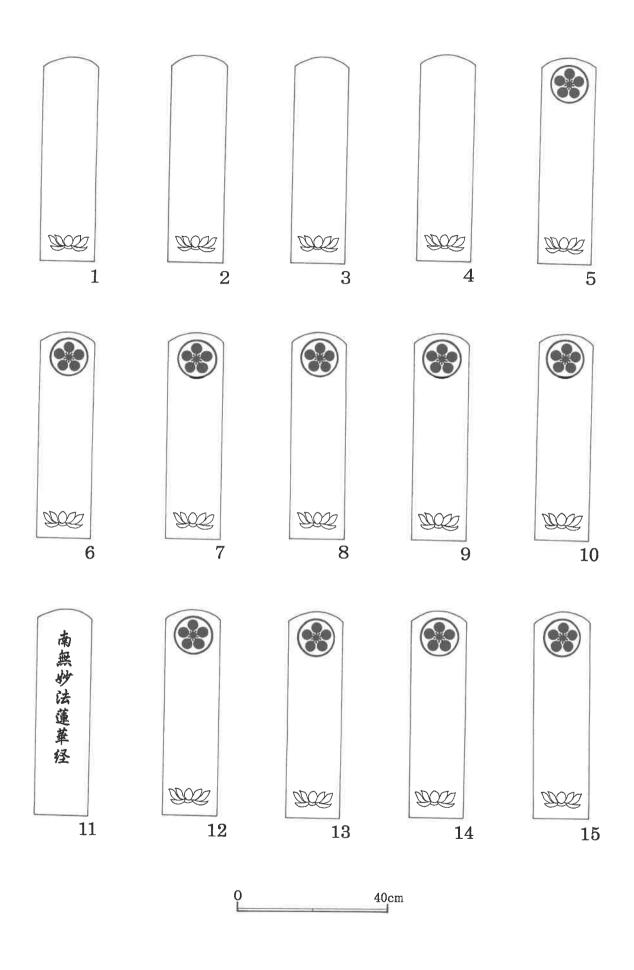
第13図 31~45 (本家油屋墓石)



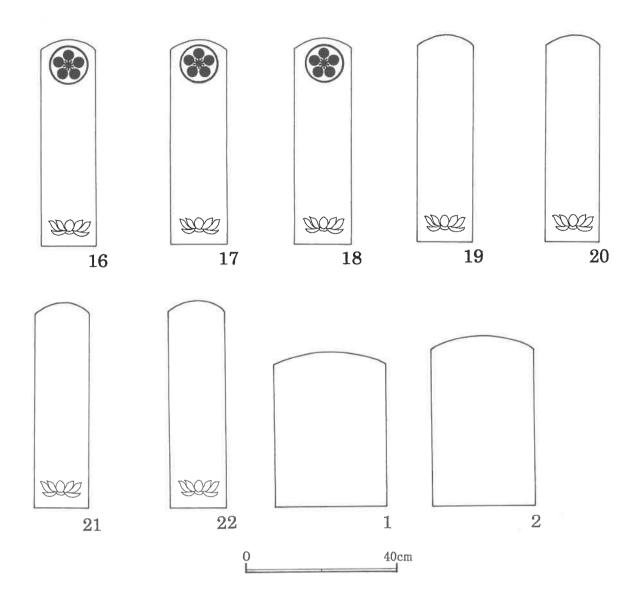
第14図 46~58 (本家油屋墓石)、59・60 (越後屋墓石)



第15図 61~72 (越後屋墓石)



第16図 1~15(本家越前屋墓石)



第17図 16~22・1・2 (本家越前屋墓石)

(30) は当主没年が昭和13 (1938) 年と確認できる夫婦世代墓であり、「本家十五代」と明記されている。また木製の(21)は、(30)の当主のみの墓標である。

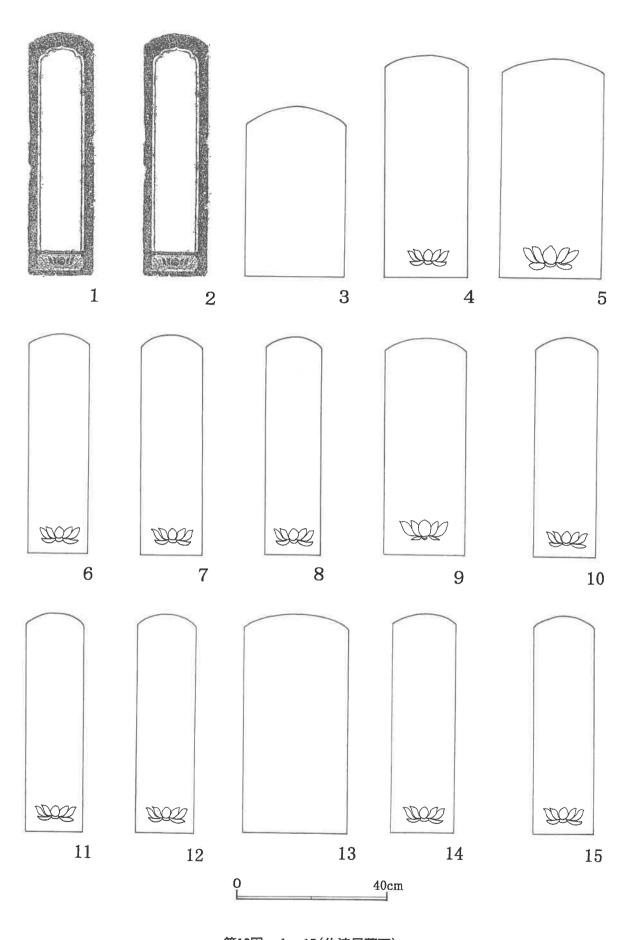
(30) 以外で墓石に表された歴代は、(41) が元祖、(39) が初代、(38) が4代、(44) が濱油屋墓石より8代と確認できるのみであり、8代以降15代までは明記されていない。

元祖・初代の表記は、当初の墓石建立時には 想定できない。子孫が継続発展して歴代を意識 した段階における呼称と思われ、廟式墓所創建 時に新たに誂えた墓石と考えることができよ う。 (46) は文政10 (1827) 年の当主没年を確認できる世代墓であるが、幅・高さは歴代墓と等しいものの、厚さが劣っている。没年より(46)に遅れる(35)が歴代墓と同規格を採る点を重視すれば、(46) は歴代から外れた世代墓と考えられよう。

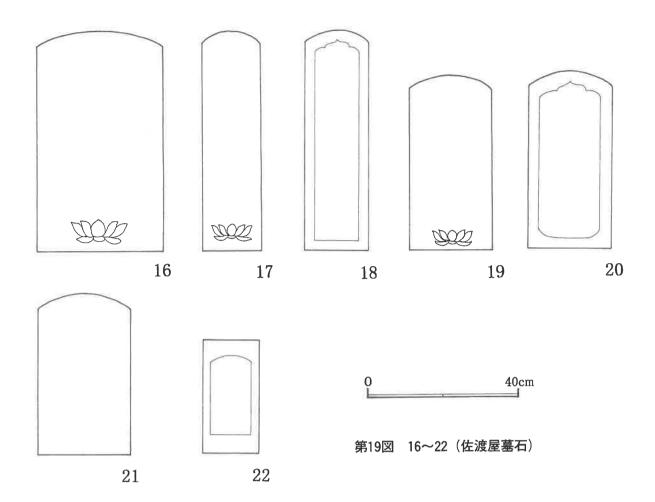
#### (2)・【濱油屋】

墓所に並置された墓石から想定される濱油屋の系譜は、必ずしも明確ではない。(9)は寛政5 (1793) 年に25歳で没した2代目の墓石であり、3代目の墓石は(12) である。

(12) に表わされた当主と先妻・後妻の続柄



第18図 1~15(佐渡屋墓石)



から系譜が判明する。(12) の当主没年は天保 10 (1839) 年であり、先妻は文化14 (1813) 年、 後妻は天保 2 (1831) 年の没年である。先妻は 記された続柄から (11) の娘であり、(12) の 当主は婿入りしたことが分かる。

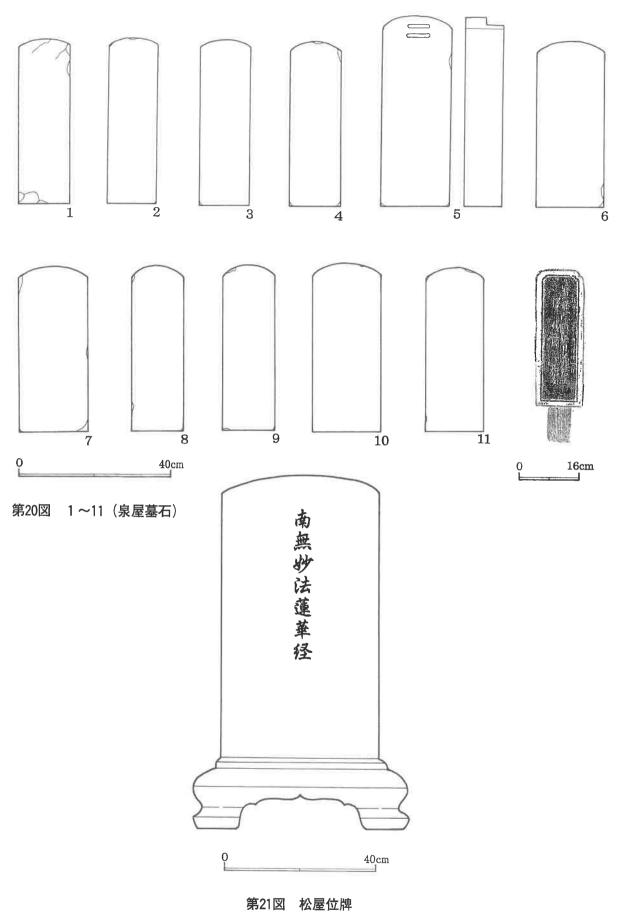
また(12)には「三代」と明記されており、本家油屋の(35)と同一内容を確認できる。一時的に本家の歴代を継いだ故に両墓所に墓石が配置されたものであろうか。

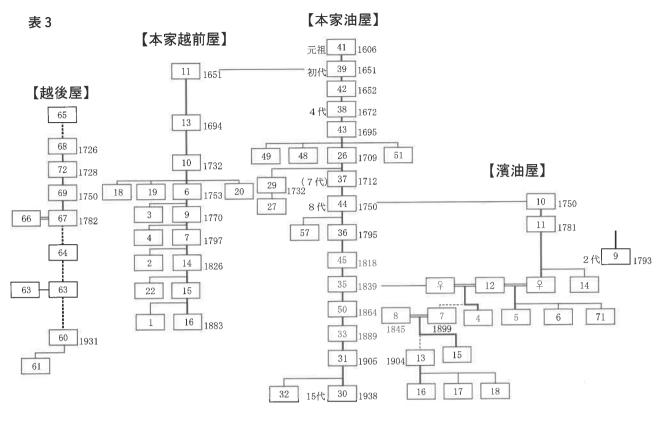
(11) の当主没年は天明元 (1781) 年であり、 (10) の子供であることが記されている。 (10) には「本家八代と」明記されており、本家 8 代 の孫の婿が本家、ついで分家である濱油屋の 3 代となったものと思われる。 (14) は (11) の子供であり、  $(5)\cdot(6)$  は (12) の先妻の子供、 (4) は後妻の子供と確認できる。また越後屋墓所隅に配置されている (71) は (12) の先妻と子供 (12) の子供のはあわせて (12) の子供のはあわせて (12) の子供のはあわせて (12) の子供の

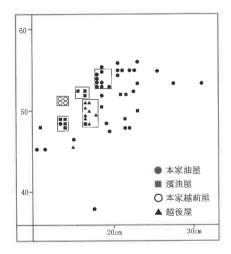
(7) と(8) は多田一門においては珍しい

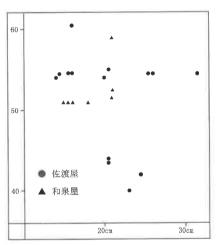
個人墓であり、5代と明記された(7)の没年 は弘化2(1845)年であり、その室の(8)の 没年は明治32(1899)年である。(8)は行年 85歳であり、(7)は40歳代で没したことが想 定できる。

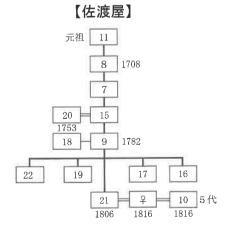
- (8) は他家から入婿したことが記されているが、(7) には5代とのみ表されており先代との関連が示されていない。生年を勘案すると(12)と後妻との子供とも考えられるものの、断定できない。(12) は3代、(8) は5代であり、墓石は確認できないものの間に4代が継いだものと思われる。(15) は(8) の子である。
- (13) は明治37年(1904)年に55歳で没している。生年を勘案すると5代(8)の孫世代となる。中間の6代の墓石も欠如しているものと考えられる。(16)・(17)・(18)の7人の子は(13)の子供である。また納骨施設内に確認された(73)・(74)は、没年から想定すると、当主墓石の認められない6代の子供と考えられる。

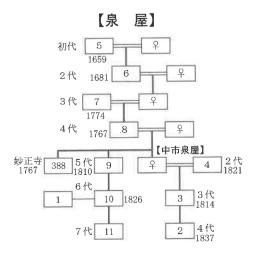












### (3) · 【越後屋】

越後屋墓所には、木製墓標1基と墓石13基が 並置されている。このうち歴代が明記されてい る墓石は(68)の2代のみである。(68)の2 代当主の没年は宝永3(1706)年であり、越後 屋墓所で確認される最古の年号である。夫婦と もに院日の9字戒名である。

2代に先行する初代は、墓石に明記されていない。歴代と想定される墓石はすべて9字戒名である中に、唯一(65)は院号をもたない6字戒名である。この点をもって(65)を初代と考えると、年代的に本家2代目あたりの分家ということになろう。

(72) の当主没年は、享保13 (1728) 年であり、(69) の当主没年は寛延3 (1750) 年である。(68) を基準とすると、3・4代目となる。(70) は (69) の子供の墓石と考えられる。(67) は天明2 (1782) 年の没年を表した個人墓であり、並置されている (66) の個人墓と組み合うものと思われる。

以後、没年の表された墓石は (60) の昭和 6 (1931) 年まで欠如する。(59) は (60) と同一 内容を記した木製墓標である。(61) は (60) の 子供の墓石である。

世代墓である(64)、並置された(62)と(63)の夫婦墓には没年が記されておらず、世代は不明である。また墓所の石柱に、明治11(1878)年の再建が確認できる「多田芳太郎」も墓石に確認できない。これらの墓石を、(60)に先行する歴代墓として位置づけることができよう。

## (4)・【本家越前屋】

本家越前屋の墓所には22基の墓石が並置されており、このうち10基は歴代の子供の墓石である。また(12)は中央に配置された題目塔であり、(5)は信女2名、(8)は大姉2名を並記した墓石である。これらを除くと夫婦の戒名を並記した世代墓は9基となる。

これらのうち、(11) には「太祖」と明記されており、その戒名は本家初代の(39) と同一である。これによって本家越前屋は、本家油屋の初代から分かれた分家と確認できる。

以後の歴代当主は、(13)が元禄7 (1694)年、(10)が享保17 (1732)年、(6)が宝暦3 (1753)年、(9)が明和7 (1770)年、(7)が寛政9 (1797)年、(14)が文政9 (1826)年、(16)が明治16 (1883)年の没年と確認できる。(15)には没年が記されていないが、(14)と(16)の没年を勘案すると、(15)はこの中間に位置した歴代と想定できよう。

以上に太祖以後8代、合計9代の歴代の墓石を確認できる。8基確認できる子供の墓石は没年を勘案すると、(18)・(19)・(20) は(10) の子供、(3) は(6) の子供、(4) は(9) の子供、(2) は(7) の子供、(22) は(14) の子供、(1) は(15) の子供と判断される。

また墓所内には2基の木製の簡素な位牌が安置されていた。このうちの1つは(14)と想定できる「六代覚山」関連の諸霊が認められ、6代は他家から婿入りしたことが分かる。他の1つの木製位牌は6代と7代関連の諸霊であり、7代もまた入り婿であったものと想定できる。認められる誉号戒名より、7代の実家は浄土宗系寺院の檀家であったものと考えられる。

#### (5) 【佐渡屋】

佐渡屋墓所には、中央に題目塔を配し22基の墓石が並置されている。題目塔を除く21基のうち子供の墓石は12基の多くを数え、残る9基のうち7基が夫婦の世代墓である。9基の世代墓のうち、歴代を明記しているのは(11)の元祖と(10)の5代目のみである。

世代墓に没年が確認できるのは、(9)・(10)・(21) の3基のみである。このうちの(10)・(21) に配された室は同一であり、(21) の当主が文化 3 (1806) 年に21歳で没した後に、5代目の(10) に再嫁したものと思われる。

- (9) の当主は、別に個人墓である (18) があり、天明 2 (1782) 年の没年が確認できる。また個人墓である宝暦 3 (1753) 年の没年が認められる (20) は、(15) の室として確認でき、当主に先立って没したものとして当主の没年を勘案すると、(9) の先代と考えられよう。
  - (8) には裏に墨書にて「戊子歳八月」と認

められる。干支を勘案すると宝永5 (1708) 年 と想定することができ、没年不明の (7) を介 して (15) に続くものと思われる。

すなわち元祖 (11) 以下  $(8) \rightarrow (7) \rightarrow (15)$   $\rightarrow (9) \rightarrow (21) \rightarrow (10)$  の 6 代に及ぶ系譜が復元できる。しかし最後の (10) には 5 代と明記されており、早く没した (21) は歴代から除かれたものとも考えられる。

12基の子供の墓石のうち、系譜を確認できるのは $(16)\cdot(17)\cdot(19)\cdot(22)$ の4基のみであり、いずれも(9)の子供と考えられる。複数の墓石に重複して記載される例が複数認められ、合計6人の名前を確認できる。

## (6) 【泉屋】

泉屋墓所に配置された墓石は11基であり、すべて歴代の世代の墓石である点において他家例と異なる。大森泉屋の歴代は墓石に明記されており、中に分家の中市泉屋の歴代も並置されている。

初代は(5)の「通吉」であり、代々「通」を通字としている。備後国塩谷城主川北石見守の娘を娶って入り婿となり川北姓となっている。慶安3(1659)年に88歳で備後国に没している。戒名は「院日号」を有する9字戒名であり、以後歴代の基本となっている。

2代は(6)の「通政」であり、延宝3(1681) 年に82歳で没している。「以後代々大森中嶋ニ 葬」と明記されており、石見で活動した実質的 な大森泉屋の初代と考えられる。従って、埋め 墓を大森中嶋に設け、詣り墓としてこの墓所を 設置したものと判断される。

「通政」の後妻の妙運は「妙玉之實母」と記されている。妙玉は3代「通宗」の前妻であり、(7)の世代墓に記されている。元禄14(1701)年に36歳で没し、銀山妙正寺に埋葬されたことが記されている。これにより大森泉屋の埋め墓は銀山妙正寺にも設けられたことが判明する。3代「通宗」は入り婿と判断され、延享元(1744)年に75歳で没している。

4代は(8)の「通賀」であり、明和4(1767) 年に61歳で没している。5代は(9)の「通重」 であり、文化7 (1810) 年に74歳で没している。 6代は(10)の「通繁」であり、天保15 (1826) 年に82歳で没している。墓所の柱に明記された、文化12年に墓所を再興した当主である。また(10)と同じ戒名は(1)としても確認でき、右端に並置されている。(1)の墓碑銘には風化により剥落した部分も多く、再建したものと考えられる。

7代は(11)であり、左端に並置されている。 左右両面および裏面に墓碑銘を記してはおら ず、没年・行年ともに不明である。

また(4)は「中市泉屋二代」と明記された「通亮」と、「通賀娘」と記された室の戒名を記した世代墓である。「通亮」は勝田氏からの入り婿であり、文政4(1821)年に75歳で没している。

(3)は「中市泉屋三代」と記された「通清」の世代墓であり、文化11 (1814)年に43歳で先代より先に没している。(2)は天保8 (1837)年に没した「通趣」の世代墓であり、中市泉屋の4代目に相当するものと考えられる。

すなわち泉屋墓所には、本家7代と分家3代 の歴代世代墓を並置したものと考えることがで きる。

本家3代の「通宗」の前妻の「妙玉」を埋葬した銀山妙正寺墓地は、銀山地区石造物悉皆調査の初回として調査したところである。しかし調査した墓石の中には「妙玉」の墓石を確認することはできない。しかし(388)として報告した墓石は、明和4(1767)年に没した「泉屋甚右衛門通賀娘/俗名お志の」の墓石であり、4代「通賀」の娘の墓石と確認できる。

また (38) として報告した、宝暦 5 (1755) に没した「施主泉屋/泉屋清九郎」の墓碑銘のある墓石は、本家・分家の歴代に「清九郎」の名前は確認できず、これまた4代の子供と想定される。さらに (110) は延享4 (1747) 年に没した「俗名おろく/いずみやた助立之」の墓石は、世代的には (388) に類似するものの「た助」を確認できないが、一門に関連する墓石と想定される。こられの墓石の所在により、「大森中嶋」以外に妙正寺にも泉屋の埋め墓が営ま

れていたことを確認できる。

泉屋墓所には、簡素な1基の木製位牌が安置されていた。「延享元甲子天十一月廿三日/寶珠院眞玉日義居士/釋妙意信女」と確認でき、この内容は本家3代の世代墓である(7)に一致している。しかし(7)には当主「通宗」と先妻と後妻の戒名が並記されているのに対し、位牌は当主「通宗」と後妻の戒名を並記している。また後妻の下位書は「信女」であり、(7)の院号の「大姉」とは異なっている。

かかる事例は、先祖代々の墓石を纏めて再整備する折にしばしば認められるところであり、可能性としては文化12年の墓所の再興時以降が考えられる。この点は、2代墓石(6)に認められる3代前妻を戒名で示す点にも関連するところである。

# 5.総括

以上恵珖寺墓地に特徴的な「廟式墓所」について概略を記述した。しかしながらいずれの墓所においても創建年代は確定できない。墓所に確認できる銘文では、本家油屋墓所が慶應3(1867)年、濱油屋墓所が明治10(1877)年の再建、越後屋が明治11(1878)年の再建、本家越前屋が文化12(1815)年、佐渡屋墓所には紀年銘が認められず、泉屋墓所は文化12(1815)年の再興、松屋墓所は文化12(1815)の再建と確認できる。

各家墓所に並置された多数の墓石は、家格に 従った規格を明示するところであるが、いずれ も石見銀山墓石分類の円頂方形型式を呈する点 において共通している。石見銀山周辺地区にお ける墓石の変遷は、基本的には墓塔から墓標へ の転換であり、ほぼ18世紀代以降に全国的な墓 石型式の斉一化の一環として墓標が現出してい る。従って特徴的な廟式墓所の創建は、墓標型 式の端緒を担う円頂方形型式の編年的位置づけ からは1700年代に遡及する可能性も考慮される ものの、その蓋然性は低いものと考えられる。

各家墓所に確認できる規格化された墓石の存在からは、これが一括して造作されたものであるならば、このうちの最新の紀年銘をもって墓

所の創建年代の想定が可能となろう。この視点では本家油屋が天保10 (1839) 年、濱油屋が明治32 (1899) 年、越後屋が天明2 (1782) 年、本家越前屋が明治16 (1883) 年、佐渡屋が文化13 (1816) 年、泉屋が天保8 (1837) 年となる。

しかしこの点は、濱油屋における規格墓石のうちの中間に位置する(11)を、次期の(12)の世代が文化9(1812)年に造立しており、天保10(1839)年の紀年銘を確認できる(12)、弘化2(1845)年が確認できる(8)、更には明治32(1899)年を確認できる(7)の墓石も同じ規格であり、同一規格の墓石の最新の紀年銘からは創建年代を想定するには無理があるようである。因みに濱油屋の石柱に認められる再建年代は明治10(1877)年であり、以上の点を勘案すると、文化9(1812)年頃の創建と想定されよう。

また本家越前屋・泉屋・松屋墓所では、いずれも文化12 (1815) 年の紀年銘が認められ、この頃の創建として理解されよう。従って、各家墓所に認められる規格墓石の存在は、墓所創建後に必要に応じて伝統に則って補充されたものと理解されよう。

多田一門の分家墓所、および関連墓所が文化 年間の創建と想定されるところであるが、本家 油屋墓所の創建年代は明確ではない。谷戸中央 に大規模に築地塀を巡らした特徴的な存在は、 恵珖寺墓地における先駆的な創建を暗示すると ころであり、18世紀後半代に遡及しての創建を 想定することもできよう。

(池上 悟)

# Ⅴ-3 恵珖寺墓地における古相の墓石

北側に開く幅の狭い谷戸に形成された日蓮宗・恵珖寺墓地においては、墓地を限る西側の 尾根の中腹に設けられた箱形の龕状の掘り込み の中、および無縁の墓石として集積された中に 墓標に先行して造立された墓塔を10数基確認で きた。

尾根の中腹に設けられた掘り込みは旧越前屋 墓所として伝えられており、前面を開放した屋 根付の特徴的な墓所に歴代の墓石を並置した 「廟式墓所」を創建する以前の、恵珖寺の最有 力の檀越であった多田一門の墓所を状態を窺わ せるところである。高さ1mほどの宝篋印塔 が6基並列されているものの、表面の風化が著 しく銘文などは確認できる状態ではなかった。

1は墓地東側の尾根裾に設けられた施設内に移設されている墓標であり、他の墓塔と同じく石材として福光石を使用している。厚さ最大で4寸(12cm)、下端幅9寸(27cm)、上部最大幅1尺1寸(34cm)、高さ3尺4寸(110cm)の規模を誇る、頂部を尖らせて円形に仕上げた大形の墓標である。周囲には幅・高さ1寸(3cm)の縁を設けているものの、下端を除いて剥離している。

本体下部には高さ4寸 (12cm) の蓮弁を立体的に表しており、本体下端には、幅4寸 (12cm)、長さ2寸 (6cm) の枘を造り付けている。本来は枘穴を有する台石と組み合って造立されたものと考えられる。

表面には上部に「南無妙法蓮華経」の題目、この左右2行に「毎自作是念以何令衆生得入無上道速成就佛身」の法華経・如来壽量品の傷を表している。題目の下位には「與慈天浄蓮霊魂菩提」と供養対象者を明記しており、下端には「施主敬白」を左右に分けて記している。紀年銘は「慶長五暦三月廿五日」と認められ、慶長5(1600)年の造立と確認できる。本来は本堂の西側に増設されて消滅した、尾根の裾にあった龕状の掘り込みの中に安置してあったものである。

石見銀山地区においては、龍昌寺の元亀元

(1570) 年に遡及する組合せ宝篋印塔を最古として、以後17世紀代までは組合せ五輪塔、組合せ宝篋印塔、一石五輪塔、一石宝篋印塔、無縫塔からなる墓塔が主体的に造立されており、1と同類の墓標は確認されていない。

類例は、関西地区の中世に遡源する墓地に求めることができる。かかる形状の墓標は、基本的に背後は船底状に丸く仕上げられており、基本形を変容させて平坦な板状としている。銀山地区とは異なった沿岸部の、他地域との密接な交流が想定される環境下で現出した墓標と考えることができよう。

2~7は、墓地の東側に集積された無縁の墓石中に位置していた資料であり、この他にも若干の類例を確認できた。2~4の3基が一石宝篋印塔、5は一石五輪塔、6・7の2基は組合せ宝篋印塔である。

2は高さ3尺1寸(93cm)を測り、斜上に立ち上がる隅飾りの一方を大きく欠損するものの、ほぼ全容が窺える資料である。高さに比べ相輪は太く、表面に「法」、笠の軒表面に「蓮」、塔身に「華」を表している。

3は相輪下端の蓮弁以上を欠損しており、高さは64cmを測る。基礎の表面には題目の最下である「経」のほか、「寛永三丙寅年/宗桂霊位/拾月小九右衛門」の墓碑銘を確認でき、寛永3 (1626) 年の造立であることが知れる。

4は高さ2尺6寸(76cm)を測る小形品である。基礎の上端に表された平坦な連弁が、総体に比較して厚く表現されており、一石宝篋印塔の造形規範の弛緩した状景を想起させる。相輪表面に「妙法」、笠の軒に「蓮」、塔身に「華経」と題目を表している。基礎には僅かに「元和四/□月」を確認することができ、元和4(1618)年の造立にかかることが知られる。

5は上部を欠損した、一石五輪塔の水輪と地輪の遺存した資料である。高さ43cmを測り、水輪表面に「華」、地輪表面に「経」の題目の一部を確認できる。また地輪には「文禄四/日受霊/八月十八」と確認でき、文禄4(1595)年

に日受の菩提を甲うために造立された墓塔であることが分かる資料である。

6は高さ8尺 (236cm) を測る大形の組合せ 宝篋印塔である。基礎は幅2尺 (60cm)、高さ 1尺8寸 (54cm) を測り、上面に平坦な蓮弁 を表している。塔身は上端を欠損する幅1尺5 寸 (44cm)、高さ1尺2寸 (36cm) を測る。笠 は最大幅2尺6寸(78cm)、高さ1尺7寸(50cm) であり、薄い軒と軒上の大形の蓮弁を特徴とす る。外傾する隅飾り間の段級は2段である。相 輪は大形の組合せ宝篋印塔に上端の宝珠下と中間に連弁を表すものであり、高さ3尺2寸 (95cm) を測る。表面に「妙法」を表して日蓮 宗墓塔たる点を明確にしている。

基礎には「経」の下に「恵照院日玄」と確認できるものの、左右の紀年銘は磨耗して確認できない。

7は台石を伴い、相輪を欠損する高さ3尺9寸 (116cm)の組合せ宝篋印塔である。ほぼ良好に遺存した資料であり、全体として6に類似するものの、笠の軒部分における相違が顕著となっている。笠には「蓮」、塔身には「華」、基礎には「経」が認められるほか、「寛永十七/妙玄尼/九月十日」の墓碑銘を確認できる。寛永17(1640)年の「妙玄尼」を供養者として造立されたことが知られる。

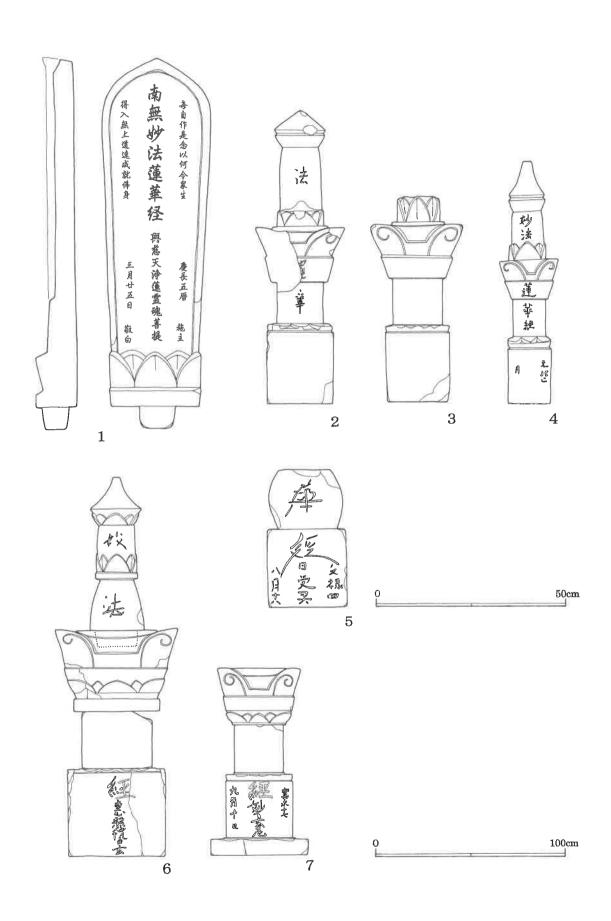
この他に実測を果たしていないが、「寛永五 戊辰年/宗善信位/五月七日」の銘文が確認で きる一石宝篋印塔も認められた。

以上に時間的制約の中で実測調査を果たした、古相を呈する墓石の概略を記した。確認できた資料では文禄4(1595)年の一石五輪塔を最古としており、この恵珖寺墓地の形成が16世紀代に遡及する点が確認できる。

銀山地区では、基本的に17世紀代までは墓石 としては各種の墓塔が独占的に造立されている が、温泉津地区の恵珖寺墓地においては慶長5 (1600) 年の板状墓標の存在を確認できた。

墓石における個別地区に限定的な状況を確認できたものとして、今後の調査の指針となるものと考えられる。

(池上 悟)



第22図 古相の墓石

# Ⅵ 総 括

1. 石見銀山遺跡における石造物調査は、平成9年度から銀山遺跡総合調査の一環として取り組まれることとなった。以後、毎年度遺跡内に分布する膨大な数の墓石調査に重点を置き、それらの分布のまとまり状態の調査、一墓地内の悉皆的調査、生産遺跡等との関連調査を鋭意進めてきたところである。それらの進行状況と得られた成果についてはすでに年度毎に報告書を刊行して公表してきたところである。

平成18年度は調査対象域を温泉津地区とし、 とくに地区内に存在する日蓮宗寺院の恵珖寺墓 地を調査箇所として選定した。既に述べたよう に、前年度までは対象地域を銀山・大森地区と して進め、当該地における墓地・墓石のあり方 については大方の状況把握を達成することがで きた。この成果に立って、今年度から銀山・大 森地区のようないわば銀・銅生産活動の中核的 地域の外縁に形成された関連地域における石造 物を調査することによってその概況と特徴を明 らかにし、もって石見銀山遺跡内の個別地域特 性と全体様相を総合的に捉えることを企図した ものである。

2. 温泉津地区内には、港湾部縁辺の傾斜地や丘陵平坦面に石造物の群集地が散見されると同時に地区内寺院に所属する墓地遺跡も少なくない。これらは温泉津地区が銀山の外港として発展してきた歴史を明らかにするうえで貴重な情報を提供することが期待されるところである。とりわけ海上貿交易に携わった有力商家(廻船問屋) 群の動向を解明するうえで寺院墓地に残る墓石群の調査は有益であり、それがもたらす成果には大きな意義があると考えられる。

日蓮宗恵珖寺は、大永5 (1525) 年の創建とされる。所在地は、温泉津湾に向かって開く東西の狭長な谷を貫く街路の中程左側に当たる。伽藍を街路に接し、墓地(南北約65m、東西約20m) は本堂の背後に伸びる小谷一面に広がる。

3. 今次調査では総数388基が確認された。墓 石は墓標系が圧倒的割合を占め、型式的には円 頂方形・方柱が約50%、平頂方形・方柱が約 12%、これに笠付方形・方柱、突頂方形が加わって墓標系で65%強になる。墓塔系の一石宝篋印塔・組合せ宝篋印塔・一石五輪塔・組合せ五輪塔が約14%になる。これらの中には近・現代造立墓等も含まれているので、ここでは形式・型式の割合は大勢として理解する必要がある。墓標系の墓石の他に宝塔、地蔵、題目塔、灯籠等が確認された。また、注目すべき特異な墓標としては舟形墓標1基が見出されている。

解読できた紀年銘は以下のとおりである。円頂方形墓標では慶長元(1596)年を最古として18世紀代9基、19世紀代31基、20世紀代5基に紀年銘が見られた。円頂方柱墓標では慶長18(1613)年の紀年が刻まれた大久保長安の逆修塔等がある。他に19世紀代1基があり、残りは20世紀代の年銘を有していた。平頂方形・方柱墓標では方形のものに18世紀代が少数あるが、ほとんどが20世紀代の立墓と判明している。笠付方形・方柱墓標は古いもので19世紀代前半があるが、多くは20世紀代に属している。その他、板碑形に文化13(1816)年、位牌形墓標に享保21(1736)年の年紀を読み取っている。

墓塔系には近世前半期のものが見られる。一石宝篋印塔では元和5(1619)年、寛永3(1626)年、同5(1628)年が、組合せ宝篋印塔1基には寛政11(1799)年銘があった。他には、一石五輪塔には文禄4(1595)年銘があり、舟形墓標の慶長5(1600)年銘等とともに当墓地の形成期を探るうえで看過できない事例もある。

4. 恵珖寺墓地のほぼ中央部にある廟式墓所は当墓地を特徴づける顕著な奥津城施設とすることができる。切石を積み重ねた基壇上に切妻様の長大な瓦葺建物を建て、その上に個々の蓮弁を陽刻した台石に円頂方形墓標を横列に配置する。典型は墓地の中央に陣取る多田一門墓所である。本家油屋の墓所を正面にし、その左右に分家濱油屋・越後屋の墓所を「コ」字形に配し、正面には入口を設えた築地塀を置く。同形態の廟式墓所は他に2例(佐渡屋墓所、泉屋墓所)あり、他に屋根付き墓所1例(松屋墓所)

があるが、多田一門墓所の建物の造りや規模は 一際目立つ存在である。また、一門中でも本家 の墓石が相対的に大きく、この点でも家父長制 下にある商家の家格と家族制が表示されている と見られる。

これらの墓所は、残された紀年銘によると19世紀前半から後半に造立されたようであり、とくに多田一門のそれは1867年~1878年に再建墓所として建てられている。このことは、佐渡屋墓所が5代目の他界を、泉屋が6代目の供養を契機に建設されているように、歴代当主等の葬儀・法要時に、歴代の墓石を整えながら集合的な墓所として設置されたことが考えられる。同時に廟内墓石型式の斉一性、納骨施設の存在、題目塔、詣り墓等々多様な機能を1か所に集積した状況も一門の歴代供養のあり方を顕著に表示するものとして注目されよう。

こうした廟式墓所が近世期のなんどき頃に採用されて普及したかを明確に示す資料は見当たらないが、少なくとも松屋墓所の石柱に刻まれた文化12 (1815)年の紀年銘等を参考にすれば19世紀前葉には存在したことが推定できよう。また、墓石には近世初頭の紀年銘を刻むものが少なからずあり、屋内に一石宝篋印塔等の墓塔を納める例も見られた。このことは同族的結合を有する有力商家が近世の早い時期から温泉津を本拠地として活動していた軌跡を示すと思われ、今後、さらに調査を重ねることによってその動向をより詳細に解明することができるのではないかと考える。

5. 既述のように、恵珖寺墓地は墓石の集中 密度が高く、廟式墓所と称した特徴的な集合墓 所が見られた。こうした様相からは、この墓地 が有力商家の奥津城として近世初期より近・現 代に至るまで幾変遷を辿ってきたことを明示し ている。その族的結合の歴史的変遷が特徴的な 墓所建設とどうか関わるのか追求を重ねねばな らないであろう。

他方、本調査においては文献史料上より有力 商家(廻船問屋)を「○○屋」の屋号、その大 まかな族的系譜等々についても記載的な調査が 行われ、その結果を収載することができた。そ れによると有力商家にも浮沈があり、その消長を辿ることも今後に残された課題であるが、関心がもたれるのは問屋数の変遷から18世紀中頃に最盛期が現出したとされることである。

次年以降は、温泉津町内の寺院墓地の詳細調査を継続し、石造物が語る地域の歴史的な動きを丹念に探り出しつつ銀山の港湾として生成・展開した様相を具体的に描き出すよう努めたいと念ずる。その際、上記のような文献史料調査の知見との整合性を図りながら相連携していっそう密度の濃い成果をものするべく調査を進めていく必要性があることを確認しておきたい。(田中 義昭)

# 報告書抄録

ふりがなし	いわみぎんざんいせきせきぞうぶつちょうさほうこくしょ						
書 名 7	石見銀山遺跡石造物調査報告書						
副書名	石見銀山遺跡石造物調査報告書-温泉津地区恵珖寺墓地-						
卷 次	6						
シリーズ名	石見銀山遺跡石造物調査報告書-温泉津地区恵珖寺墓地-						
シリーズ番号	6						
編執筆者	田中義昭、池上悟、宮本徳昭、湯川登、大門克典、中田健一、鳥谷芳雄						
編集機関	島根県教育委員会 大田市教育委員会						
所 在 地	〒690-8502 島根県松江市殿町1番地 TEL0852-22-5649 〒694-0064 島根県大田市大田町大田口1111番地 TEL0854-82-1600						
発行機関	島根県教育委員会 大田市教育委員会						
発行年月 2	2006年 3 月						
調査原因る	石見銀山遺跡総合調査(石造物調査)						
所収遺跡名 所 在 地 北 緯 東 経 調査年月日 調査面積()							( )
石見銀山遺跡 大田市大森町 (市町村コード) 32205 同温泉津町・仁摩町		35度 5分 30秒 (仙ノ山)	132度 26分 30秒 (同左)	1997年~			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	石	造物	特記事	項
五見銀山遺跡 鉱山町 城跡 港 港町 集 道 景観			一石宝篋印塔 一石五輪塔 組合せ五輪塔 円頂方柱型墓標 円頂方柱型墓標 円頂方柱型墓標 尖頂方柱型墓標 尖頂方柱型墓標 笠付方柱型墓標 笠付方柱型墓標 笠付方柱型墓標 笠付方柱型墓標 笠付方角柱型墓標 笠付た角柱型墓標 で伸型墓標				

# 石見銀山 温泉津地区恵珖寺墓地

平成18 (2006) 年 3 月

- 編 集 島根県教育委員会·大田市教育委員会 松江市殿町1番地 大田市大田町大田口1111番地
- 発 行 島根県教育委員会 松江市殿町1番地
  - URL http://www.pref.shimane.lg.jp/sekaiisan/iwami\_ginzan/
- 印 刷 株式会社 報 光 社